ハンドボール「第54号目次」

昭和43年6月号

表紙写真　関東学生春季リーグ戦　法政大―芝浦工大戦。法政大の攻撃。５位に終ったものの法政大の健斗はリーグ戦を大いに盛りあげた。

（５月３日　駒沢第２球技場）

時評

強化本部に協力を

先号に掲載したようにハンドボール協会にも、トップレベルの技術・戦術の向上を中心に考える強化対策本部が生れる運びになったことは大いに喜ばしい。

本誌の協会創立三十周年記念号で特集した地方協会理事長の「協会に望む」の声の中で、一番多く望まれていたことの一つがオリンピックという声であった。これにはトップレベルの向上と底辺の拡大という二つの球界の願いがこめられていた。

それを受け、眼前に迫ったオリンピックのための強化対策本部が設けられたことは喜ばしい限りである。

しかし、できたからといって、ただ単純に喜んでいてはいけないのは云うまでもなかろう。

むしろ、問題は今後にあるといってよい。

多くの難問が待ちかまえているのは眼に見えている。難問が多いからと云ってしりごみしていたのでは、まったく解決には進んでいかない。

財政的問題―強化対策には金がつきものである。これをどのようにして、作り出していくか。まず問題があろう。にわかに必要といっても、右から左というものでないだけに、前もっての充分な対策が必要となろう。選手やコーチ達には、十分とは云わないまでも、練習に専念できるような態勢にもっていくことが一つの大きな目標にもなってこよう。これは強化対策本部というより、日本協会の問題であろうが、実際にタッチする強化費が十分でないことはすぐにひびいてくるだろう。

強化対策本部というと、とかく技術畑のみの分野を考えがちであるが、そうでなく、種々の分野をカヴァーしたものが作られなくてはなるまい。海外情報の収集、国内試合の統計的処理、多くの試合のフィルム化、海外試合のフィルムを手に入れることなど……敵味方を知る上にぜひとも必要な情報関係の役目も必要になってくる。このように見てくると強化対策本部が実質的に活動するためには、多くの人間が専心的に働くことと、かなりの規模をもった投資とが必要になってこよう。

強化対策本部に入る人はまずこれに専心すべきであろう。片手間仕事にできるものではないし、またやっていたならば、存分な対策はたてられるわけがない。

強化対策本部が出発したなら、ハンドボール界全員でバックアップというより、すべての者が本部の一員になったつもりで、各地に強化対策の一助になるような運動が展開されることが望まれる。

強化対策本部員だけが強化をするのではなく、ハンドボール界全員が強化に努めるのだ。ミュンヘンをめざして…(TS・F)

選手強化対策本部発足にあたって

日本協会理事長　荒川清美

永年の宿願であり、今後の日本ハンドボール界の進むべき道と命運を賭けるといってもよい選手強化対策本部の新発足にあたって全国関係者の理解と協力を得るためその構想のいったんをここに述べようと思う。

結論からいうならば、選手強化対策本部が設置されたからといって一気にものごとが解決されるわけではない。

冒頭から、消極的な発言に感じられるかたも多いだろうが、ミュンヘン・オリンピックをめざすわれわれにとって、その前途に横たわる問題は極めて多く、しかもけわしい内容ばかりである。特にハンドボールは、東京オリンピック大会の実施種目からはずされたがために、こうした選手強化問題などでも、大きなハンディキャップを負っている。即ち、他競技団体は東京オリンピックの経験によって、トップレベル強化の対策・方法はもとより、一応の結論さえも得ていっそうの工夫をもってメキシコをめざし、ミュンヘンをめざすことができるのである。

しかるに、ハンドボールは今ようやくスタートラインにつこうとしているのだ。換言すればわれわれに与えられているものは〝強化〟という二字であって、それ以外は何もない。練習をどこでやるか、その資金は……もっとも基本的なことがらさえも、現状はゼロに等しいのである。

だが、焦ってはならないと思う。一つ一つ地道に私は積みあげていきたいと思う。

砂上に築城する愚だけはなんとしてもさけなければならないのである。

しかしながら、現実はかけあしでせまって来ている。

今秋には宿願のベストシックス入りをかけて全日本女子が三回目の世界選手権出場をはたす。さらに、世界のハンドボール関係者が夢にまでみたミュンヘンオリンピックへつながる第7回世界男子7人制選手権大会が1970年を期してフランスで開かれる。機関誌でも御承知のように、日本はこの大会にアジア代表としての出場が確定している。おそらくこの大会の上位8ケ国はミュンヘン・オリピックの出場権を得ることになるであろう。われわれは是が非でもこの大会でミュンヘン行きの切符を手に入れたい。

一方で焦らずといいきかせ、一方で急を告げるこの矛盾は私自身にとっても大きな苦悩である。現状において、これを克服するのは、不乱の情熱以外にないと考える。

選手強化対策本部をどう動かすか—具体的な論題に入ろう。

現在、考えているその組織は別表の通りである。

トップレベルの強化というものは、選手を集め練習をつづけることで、コト足りるものではない。特にオリンピックがめざすものであれば、相手は世界である。あらゆる海外の情報を収集し、分析することは不可欠である。

選手個々についても多角的・科学的なデーターが必要である。今やナショナルプレイヤーについては、ヨーロッパの列強では、心理学的見地にも調査を深め、その結果、優秀な技倆をもつ者でもふるいおとされた例さえあると伝えられている。

そうした分野の仕事をするために企画委員会を設け、さらに専問化、分割化して強固なものとしたい。

指導パートを男、女に分けることは常識的ではあるが、無二の方法でもある。それぞれの権威を集めて、その指導体系を一日も早くねりあげることが、選手強化対策本部の最初の仕事であり、すでに女子の一部はスタートしている。

次に私見の域をまだ出ぬが選手の選定についてふれよう。

男子の場合とりあえず今年度は夏までにナショナルチームを編成し（本誌4頁参照）、そのメンバーをオリンピック強化（候補）選手とすることを予定している。これらの選手を集めて、年度内に2〜3度強化合宿を行い、事情が許せば、国際試合を来年度には組みたいと考えている。

今後に輩出される優秀選手は機をみて補充し、1970年のフランスの世界選手権へのムードを盛りあげようと思う。

広く深い範囲でプレイヤーをスカウトするシステムも夏までには確立したい。

女子については、オリンピックでの採否が未定だけに、現在、合宿に入っている今秋の世界選手権代表をともかく強化することが最良であろう。ミュンヘンでの実施が決まれば改めて対策を考じたい。規定からいけば、女子の場合は、ミュンヘンの前にもういちど世界選手権があるハズだ。

選手強化対策本部の活動にともなって、国内球界にも修正を必要とする問題があることは事実である。

特に、ナショナルチームのプレイヤーを発掘する最大の場になるであろう各種全国大会については来年度から一つの筋を通した方向へまとめたいと考えている。大会の開催期を根本的に検討しなおし、プレイヤーやチームに最高目標となる大会を設けたい。

具体案については、いまのとこ

選手強化対策本部
組織図（荒川私案）

強化本部長
｜
副本部長
｜
本部委員会
├ 企画委員会
│　├ 国際
│　├ 医事
│　├ 科学
│　└ 調査研究
└ 指導委員会
　　├ 男子強化委員長 ― 男子強化委員
　　└ 女子強化委員長 ― 女子強化委員

ろ白紙だが、「現行大会の整理・統合」ということになろうか。

〝国内最高大会〟を開催することで、私はもうひとつの狙いを持っている。競技収入の期待だ。

机上論に終わるかも知れぬが、大会運営費のために競技収入をあげるのではなく、強化費へも繰り入れられるような成果を得ることは、大会の内容によっては充分可能であると思う。

日本ハンドボール界の30年の球史にたえずつきまといながら活路を得ていないのは〝財源〟である。

大会によって財源を得るためには、レベルの高い一流チームの激突が演じられねばならない。そうしたチーム、そうしたプレイヤーを造り出すことも選手強化対策本部の大きな任務であろう。

残念ながら、お金がなければ強化はできない。いかにして、充分な強化費を捻出するか―。選手強化対策本部を発足させるにあたり、もっとも苦慮し、将来もたえず苦心するであろうこれは課題である……。

こうした主観的、客観的条件のなかで、日本ハンドボール史上初めての選手強化対策本部はスタートすることになった。

選手強化策の成功なくして日本ハンドボール界の飛躍はあり得ない。責任は重大である。

と同時に、選手強化対策本部の成否のカギは全国関係者の理解にもかかっているといえよう。

ナショナルチームに加ったプレイヤー、コーチングスタッフ、選手強化対策本部員……誰へもわれわれは〝保証〟を与えることが出来ない。

しかし、やり遂げなければならないのだ。犠牲のともなう仕事でもあるのだ。

また前述したように横たわる課題、克服すべき条件はあまりにも多く大きい。それがために、選手強化対策本部の歩みは牛のそれにも似たことになるかも知れぬ。しかし、そうしなければ一つ一つを解決してはゆけない。

今ここで大地にしっかりと根をおろした選手強化対策本部を造ることができたなら日本ハンドボール界の将来はいっそうの広がりを示すであろうという自負が私にはある。そのためには目先のことにどらわれず確実なステップを踏んでいきたい。それがおのずと成功の道につながることも信じて疑わない。われわれの第一の目標である1970年2月の世界選手権まであと1年9ヶ月。みかたによっては短いかも知れぬ。だが全国関係者諸賢の深い理解が、われわれのこれからの歩みを見守ってくれたなら、この月日はまさに充実した一日、いや一時間一時間になるであろう。重ねて全国関係者諸賢の協力を切望したい。（荒川理事長は選手強化対策本部長兼務）

判定解釈の統一を企って

全日本担当審判員研修会開く

日本協会と同審判部では今年度に行われる全日本選手権各大会で判定解釈の相異がおきる弊害をなくすため、5月26、27、28日の3日間、東京代々木の青少年総合センター（旧・東京オリンピック選手村）に安藤審判部長以下各大会に予定される担当審判員72名が集まり『全日本大会審判員研修会』を開いた。

研修会は、26日夕刻から本格的協議に入ったが、注目されるのは全般的な協定事項のほか、判定解釈のうち、当面もっとも見解のわかれるケース四つを採りあげて〝分科会討議〟したほか、規則書の各条を四分類して同ようにその研修テーマとしたことである。

各分科会のテーマは次の通り。（本誌ではこの席上の結論を次号（7月1日発行）に特集する予定である。）

▼分科会研修テーマ▽第1分科会（19名）「規則書第1条～第5条」および「ストーリングの解釈と適用の実際について」

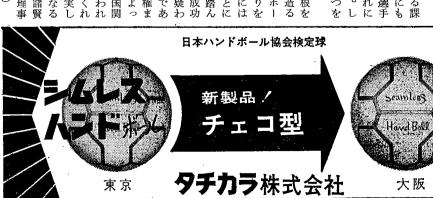
▽第2分科会（19名）「規則書第6条～第9条」および「退場になるケース、7Mスローになるケースの判定についての統一見解をもとめる」

▽第3分科会（18名）「規則書第10～第13条」および「フリースロー（特にゴール前）の不正配置に対するルール適用の統一見解を求める」

▽第4分科会（16名）「規則書第14条～第17条」および「選手のプレーにおけるマナーおよびベンチのマナーについての処置について」

なお、全員による〝実技研修〟は27、28日9時から駒沢第2球技場で開かれていた第6回関東学生新人戦の各試合で行われた。

全日本男子（ナショナル・チーム）、8月上旬に発表へ

新設の選手強化対策本部で選こう

昭和43年度男子ナショナルチームのメンバーは、新発足の選手強化対策本部によって8月上旬に発表される予定だ。

ナショナルチームの決定はこれまで技術委員会の担当だったが、今年度から選手強化対策本部が設けられたため全権が移行されたものである。

ナショナルチームの公表は、毎年4月に行われることに昨年決まったばかりだが、今年度はこのような事情から全日本総合選手権終了後の8月上旬まで延びた。荒川日本協会理事長兼選手強化対策本部長は『選こうの基準はこれまでの技術委が制定したもの（＝本誌52号23頁参照）を若干手なおしして受けつぐことになろう。

また、選こう委員の顔ぶれは、選手強化対策本部のスタッフが決まったうえで協議して決めるが強化対策本部以外からも人を求めたい。

構成については、私個人は、GK4、FP22人ぐらいがよいと思うがどうなるか……。

コーチングスタッフは強化対策本部の中から選ぶつもりだ』と話している。

なお、女子の昭和43年度ナショナルチームは、さきに発表された第4回世界女子7人制選手権出場の全日本代表14人（田村紡7、大洋デパート、大崎電気各3、三菱鉛筆1）をそのまま当てることに決まっている。

男女の42年度ベスト・セブンと高校男女の42年度優秀選手（各15人）は2月に発表された（本誌51号3頁参照）

総収入、七百五十万（一般会計）

強化、審判、普及などに37％支出

日本協会財務部（担当・浜田常務理事）は、2月の全国評議員会で一般会計の収入予算表の承認をうけ、別表のように発表した。

支出については総額七百六万五千円がみこまれ、このうち競技関係費（一般会計）は約二百八十万円である。

これを、強化に60％、審判に20％、技術、晋及に各10％と分割する腹案もすでに公けにされている強化の60％（約百六十八万円）は、女子6、男子4の比率で、各ナショナルチームの強化に活用される予定だ。

なお、スポーツ振興法による60万円は六大全日本選手権（総合、選抜、学生、高校、実業団、教職員）に10万円づつ平等補助されることになっている。

支出予算表については、各パートからの提出を待って確定表が近く発表される。

なお、この収入予算表と同時に昭和44年度に予定されるソビエト男女ナショナルチーム招待の第一次予算案も作成された。

それによると総額は三百七十万円で、そのうち国内旅費と宿泊費の合計二百三十万円がもっとも多額である。ソビエトチームが、日本までの旅費を請求してきた場合は、総額はさらに大きくハネ上がることになる。

ソビエトチーム来日に関する本交渉は、今秋、全日本女子が訪ソした際に行われることになっている。

昭和43年度一般会計収入予算表

項目	金額
オリンピック基金	110,000円
加盟金	410,000
登録金	1,300,000
大会参加料	350,000
検定料	1,100,000
審査料	150,000
ルール・ブック	250,000
補助金	
競技力向上費	2,320,000
振興金	600,000
日独特別会計繰越金	900,000
計	7,490,000

日韓交流、高体連で検討

韓国側からの要望で再開濃厚となった『日韓高校スポーツ交流』は、日本側の体協、高体連などで検討の結果、今年は韓国側が希望するハンドボールなど13種目案を全面的に受け入れることが難しいとし、縮少して日本選手団を訪韓させることになったようだ。

実施種目や派遣人員については6月5、6日東京で開かれる全国高体連理事会で協議され、そのあと体協の承認を得る予定。

大崎電気ら男女各5チーム
全日本総合の日本協会推せん

8月6日から長崎で開かれる第20回全日本総合選手権に日本協会が推せんする特別出場チーム男女各5が次のように発表された。

▽男子

大崎電気（埼玉）
全立教大（東京）
芝浦工大（東京）
東京教大（東京）
大阪イーグルス（大阪）

▽女子

田村紡（三重）
大崎電気（埼玉）
大洋デパート（熊本）
三菱鉛筆（神奈川）
愛知紡（愛知）

このほか世界選手権代表「全日本女子」の特別出場が内定しているが、正式参加かオープン参加かは未定。

学連代表は9チーム

なお、全日本総合選手権男子の今年度各部門別出場割り当て数は次の通りである。女子は今年も自由。

▽ブロック代表……12
（内訳・北海道1、東北1、関東2、東海2、北信越1、近畿2、中国1、四国1、九州1）
▽全日本学連推せん……9
▽全日本実連推せん……4
▽開催県・長崎代表……2

学連、実連推せんチームは近く日本協会へ報告される。ブロック代表ではすでに九州地区の予選が終わり熊本クの出場が確定。また、ブロック代表のうち棄権地区が出た場合はその数を学連にまわし補充する。

高校は〝混成〟も承認 福井国体

10月2日から6日までの5日間福井県高浜町で行われる第23回国体ハンドボール競技の要領が発表された。

例年と大差はないが、本誌既報のとおり、昨年（埼玉国体。地区予選会を含む）ある一都道府県を代表して参加した者が、今年の大会に異なる都道府県から出場することはできなくなった。高校・大学などからの新卒業者はこの限りではない。

また、高校部門が、今年から男女とも単独校でも2校以上の混成でもよくなったのは大きな改正といえよう。

混成の場合の登録については特例が設けられ、県名によるチーム名称のみ登録させて（登録金不要）、選手については、その所属校が県協会に登録してあり、5月末日までに日本協会に登録完了されていればなんら問題はない。追加登録については県大会までならば承認される。

学生（含大学院生）の出場は、一般男子は今年も認めず、女子は一チーム3名以内なら参加できる。地域別・部門別代表チーム数は別表のとおりである。

第23回（福井）国体
地域別代表チーム数

地域名	一般男子	一般女子	教員 高校男子 高校女子
北海道	1	1	各1
東北	4	1	各1
関東	6	2	各1
東海	3	2	各1
北陸	3	1	各1
近畿	5	1	各1
中国	2	1	各1
四国	2	1	各1
九州	3	1	各1
福井	1	1	各1
計	30	12	30

新鮮な全日本実連執行陣

全日本実業団連盟が多数の新理事を加えて執行部の強化を企ったのは注目されるものがある。（本誌既報）

これまでは、どちらかといえば会社側関係者が主力で〝現場〟の人間は少なかったのだが、一気にこの傾向が逆転された。

これでようやく連盟活動が期待できる、といった声が聞かれるのも卒直な発言であろう。

新スタッフは一口にいって新鮮な印象である。

ことに竹野、池田、江名の三氏は選手としても第一線で健在ぶりを示している人たちであり田中、三谷（以上留任）近藤、岡部（以上新任）の各氏もチームを率いる立場にある。現場の空気をどのようにその運営へ反映させるか興味深い。

スタートと同時に「日本リーグ検討」という大テーマを背負って早くも活溌な動きを見せているようだが、年とともに全日本実業団連盟の周囲からは球界に大きな作用を及ぼす問題の発生する度合いが高まって来よう。

というのは、すでに女子がそうであるように、男子も近い将来、国内のトッププレイヤーのほとんどを実業団がかかえこむ時期が来ると予想されるからだ。

同好会的存在だった各実業団が最近では、かなり全社的バックアップを受けるようになって来ている。現に、3月末の初理事会では加盟各社の新卒者に対する「求人（募集）要領」などを一覧表にして高体連、学連各チームに配布することを申しあわせている。

こうした傾向が強まれば強まるほど全日本実業団連盟の力は、球界内に大きく張り出してくるわけで、その機を前に、フレッシュな人材で執行部を固め、前進を企ろうという今回の人事は、大きな意義があり、古賀会長、浜田理事長、平出副理事長のリードが注目される。

また、直接関連を持たぬ立ち場の隅田（早大OB）、進藤（立大OB）両氏を登用したのも、これまでのハンドボール界では見られぬケースでありその成果を期待したい。（S）

常務理事に栗村氏交渉

全日本実業団連盟ではさきに辞任した小杉仁造氏の後任常務理事として栗村誠氏（愛知紡社長）を交渉中である。

● 春の学生リーグ戦

激戦の関東，日体大が12シーズンぶり

～日体大女子ついに14季連続優勝～

関西は同志社，九州は西南学院大

春の学生リーグ戦は4月27日の関東，東海両地区を皮切りに，全国7地区の学連で一斉に熱戦の幕をあけた．

オリンピック確定の報があるだけに，各地ともかってない意欲がのぞかれ，30年の年輪を経た学生界のゆるがぬ地力を示した．栄冠は`関東が日体大．関西では同志社大が獲得．注目の九州は西南学院大が優勝した。このほか東北北海道は東北大，北信越は富山大，東海は中京大，中四国は岡山大がそれぞれ春の王者に決まった．

女子は関東では日体大が今シーズンも快調を誇り，東海は激戦のあと中京大が優勝校になった．

春季優勝校						
▽東北・北海道	東北大	▽関　西	同志社大	▽関東女子	日体大
▽関東男子	日体大	▽中四国	岡山大	▽東海女子	中京大
▽東海男子	中京大	▽九　州	西南学院	▽西日本学生	同志社大（既報）
▽北信越	富山大				

東北大が"春"に初優勝

健斗した仙台大、岩手大

東北・北海道

第2回東北・北海道学生春季選手権は5月4、5の両日盛岡市の岩手県営体育館に東北6校、北海道1校の7校が参加して行われた。

大会はまず単発4カードを行ったあと、勝者リーグで1位から4位までを、敗者リーグで5位以下を決める方式が採られた。

その結果、第1シードの東北大がリーグ戦で88点をたたき出す秀れた攻撃力で快勝。春の大会では初、秋の選手権との通算では3回目の優勝となった。

▽予選トーナメント

東北学院大 27（12-12, 15-8）20 北海道大

岩手大 35（21-5, 14-4）9 宮城教育大

仙台大 23（13-9, 10-10）19 山形大

この結果、勝者3校と東北大（昨秋優勝）が決勝リーグへ進出

▽5・6・7位決定リーグ

北海道大 29（17-4, 12-8）12 宮城教育大

北海道大 22（12-10, 10-5）15 山形大

山形大 18（9-11, 9-5）16 宮城教育大

【順位】⑦北海道大⑧山形大⑨宮城教育大

▽決勝リーグ

岩手大 23（9-9, 14-13）22 東北学院大

東北大 39（18-8, 21-5）13 仙台大

仙台大 24（12-9, 12-11）20 東北学院大

東北大 28（12-10, 16-6）16 岩手大

東北大 21（11-7, 10-8）15 東北学院大

岩手大 30（15-8, 15-7）15 仙台大

【順位】①東北大3戦全勝②岩手大2勝1敗③仙台大1勝2敗④東北学院大3敗

【後記】春のリーグ戦も2度目。新チームを卒いて各校とも意欲的な試合ぶりで、東北大が気力、技術ともいちだんと充実、優勝を飾った。

全般的にレベルは向上していたが、東北大は昨年の主戦メンバーが残っているうえ、戦力になる新人を加えて圧倒的な試合ぶりだった。

また、昨年から加盟した仙台大と地元の岩手大がそれぞれ持ち味を活かして上位を占めたのは新鮮な話題といえよう。

これに反して、長くこの地区のトップにあった東北学院大が卒業の痛手が埋め切れず、かってない低調を示してしまった。奮起を期待したい。

運営面では短期の日程から今後は、長期の日程へと発展させることにより、充実した練習、効果的な策戦など高度な内容がみられるようになると思う。いっそうの努力にはげみたい。（石沢正夫・東北北海道学連委員長）

富山大が6連勝飾る

接戦の末、金沢大を降す

北信越

北信越学生春のリーグ戦は、5月18、19の両日富山市の富山大グランドに新加盟の金沢工大など6校が参加して開かれた。

その結果、予選リーグA組で1位となった富山大と同B組1位の金沢大が優勝を争い接戦の末、富山大が勝ち、5シーズン連続6回目の（覇）権を握った。

▽予選リーグA組

富山大28（15 13－11 7）18金沢工大
福井大21（9 12－6 7）13金沢工大
富山大24（10 14－5 8）13福井大
【順位】富山大②福井大③金沢工大

▽同B組
金沢大25（10 15－11 5）16金沢美大
金沢大12（7 5－5 7）12本州大
引き分け
本州大21（11 10－9 4）13金沢美大
【順位】①金沢大②本州大③金沢美術工芸大

▽5・6位決定戦
金沢工大27（14 13－8 5）13金沢美大

▽3・4位決定戦
福井大22（14 8－6 5）11本州大

▽決勝戦
富山大19（9 10－7 8）15金沢大

【後記】理想としては6校の総当りを行いたいのだが4県にまたがる参加校のため、このような形式で試合を進めた。

各校とも体力的にも技術的にも向上のあとがみられ、特に決勝の富山大—金沢大戦は多彩な攻防の応しゅうで、見応えのある試合となり後半20分まで一進一退。地力にまさる富山大がそのあと加点して押し切った。このほかでは本州大の進境がめだった。（若山博・北信越学連理事長）

立教大の5連ぱ成らず
芝工大4敗
大会盛りあげた法政の活躍

関東

創立30周年記念を兼ねた関東学生春季リーグ戦は、4月27日駒沢第二球技場で開幕。男子は今春から4部制となり1部8校、2部以下は各7校が参加、女子は3校が出場して5月25日までの8日間全97試合の熱斗が演じられた。

男子1部は記念リーグにふさわしく大混戦となり、5日目で全勝校がなくなり、終盤2日に優勝がかけられた。その結果、最終日、日体大が法政に完勝したあと、5連ぱを狙う立教が早稲田に惜敗したため日体大が6勝1敗で首位となり12シーズンぶり18回目の優勝を飾った。2部は慶応、3部は東京学芸大、新加盟7校による4部は明治学院大がそれぞれ優勝した。

女子は、リーグ直前、国士館大の棄権で日体大、東女体大、日女体大によるリーグ戦となったが、日体大が、成長いちぢるしい東女体大をふり切って14シーズン連続通算18回目の優勝を飾った。日体大が昭和36年秋以来つづけている対学生無敗記録も「64連勝」に伸びた。

▽男子1部
立教大21（8 13－12 6）18中央大
芝浦工大26（15 11－13 8）21早稲田大
日体大25（13 12－10 4）14明治大
法政大20（6 14－7 9）16東京教大
中央大23（12 11－8 5）13東京教大
日体大20（12 8－8 2）10早稲田大
立教大12（8 4－4 4）8明治大
日体大17（11 6－5 3）8中央大
早稲田大13（7 6－3 8）11東京教大

得	【早大】		【教大】	得
0	綿貫	GK	上野	0
1	萩原	FP	古屋	1
5	森田		畑	2
3	鈴木幸		稲垣	1
3	鈴木博		平岡	5
0	尾島		住森	0
1	杉山		浅野	2
0	斎藤		斎藤	0
0	武		水藤	0
			深川	0
13（3）		7MT		（2）11

法政大22（9 13－7 9）16芝浦工大

得	【法政】		【芝浦】	得
0	金	GK	高橋	0
0	和田		杉山	0
4	大山	FP	明石	2
9	石井		秦	5
6	川島		村上	0
0	五十嵐		山中	1
0	柳		白神	2
2	荒井	（主審平塚）	高鍬	4
0	出口		大矢	2
1	武井		森	0
0	西村		平瀬	0
22（2）		7MT		（1）16

芝浦工大15（7 8－7 5）12明治大
東教大23（15 8－8 9）17法政大
芝浦工大15（9 6－7 7）14日体大
法政大13（4 9－8 3）11中央大
東教大17（8 9－8 7）15東教大
早稲田大11（7 4－3 5）8明治大
早稲田大20（8 12－4 3）17法政大
東京教大18（12 6－7 7）14芝浦工大
中央大15（7 8－6 6）12早稲田大
明治大20（7 13－3 8）11法政大
中央大21（8 13－7 5）12明治大

得	【明治】		【中央】	得
0	田中	GK	望月	0
0	岩田		佐々木	0
3	田辺	FP	佐野	4
2	鈴木		堀切	5
0	兼子		森山	2
4	鈴下		児玉	3
2	藤井		喜田	2
0	末田	（主審中沢）	植木	4
0	浦野		平元	1
1	住田		長広	0
0	野村		植田	0
12（1）		7MT		（1）21

日体大19（10 9－8 9）17立教大

得	【立教】		【日体】	得
0	川口	GK	本田	0
0	天野		加藤	0
3	野田	FP	森	0
7	東		斎藤	1
3	小野口		高橋	7
4	戸田		谷藤	3
0	倉前		早川	4
0	細川	（主審安藤）	藤中	4
0	加藤		井上	0
0	古屋		大川	0
0	藤本		笠原	0
17（0）		7MT		（0）19

日体大20（9 11－10 6）16東京教大
立教大15（6 9－9 5）14芝浦工大
明治大15（6 9－7 7）14東京教大
日体大20（5 5－2 3）2法政大
早稲田大19（7 12－9 9）18立教大
中央大21（11 10－9 8）17芝浦工大

【後記】一部リーグは近年まれにみる混戦状態となり優勝の日体大は芝浦に1敗、8位の教大が芝浦に1勝し中間位も互に星のつぶし合いがあって同率同位が出来、

—関東学生春季リーグ（男子1部）—

	日	立	中	早	芝	法	明	教	勝	負
①日体大	…	○	○	○	●	○	○	○	6	1
②立　教	●	…	○	●	○	○	○	○	5	2
③中　央	●	●	…	○	○	●	○	○	4	3
③早稲田	●	○	●	…	●	○	○	○	4	3
⑤芝工大	●	●	○	○	…	●	○	●	3	4
⑤法　政	●	●	○	●	○	…	●	○	3	4
⑦明　治	●	●	●	●	●	○	…	○	2	5
⑧東教大	●	●	●	●	○	●	●	…	1	6

【2部順位】①慶応6戦全勝②日大・国士館・明星3勝3敗⑤順天堂・武蔵工大・防衛大2勝4敗＝最下位決定リーグの成績は別掲

全勝優勝もなし又全敗最下位もないと云う珍現象となった。

リーグ前の予想は日体大、教大が優勝候補といわれていたがリーグ開幕早々教大は伏兵法大に屈しその後早大、中大、立大と敗けこんで完全に優勝から見離された。一方教大を破った法大は2日目に芝浦を降し昨年とは見違えるようなチームプレーに徹し3日目の対立教の前半は1点を争う好試合を展開、全く予断を許さぬ状態が続いた。後半石井が負傷し退いてから数分の間に点差が開き勝敗がきまった。法政としてはあきらめきれない試合であったろう。全く不運の一戦であった。石井、大山が健在であったらもっと好成績を残したであろう。

日体と立教は前半戦で順調に勝星を上げた。芝浦は法政に敗れたとはいえ4日目に日体大を1点差ではあるが名門振りを発揮し破り中盤完全に立直りの印象が強かったが教大、立教、中央と黒星が続いて一部昇格以来初の不成績に終った。芝浦に惜敗した日体は対立教に優勝をかけ少差ながら立教を降し各1敗同志で優勝は最終日に持込まれた。

最終日日体は法政に楽勝し立教は早稲田に苦杯する結果となり日体の6年振りの優勝が決まった。

立教は木野、北村卒業の後をうめる人材がいないのが痛かった。

昨年不振の中央、早稲田の上位躍進の努力は賞賛すべきであろうがリーグを通して両校共今少し安定性がほしい所である。尚一層の精進を期待する。明治、教育両校共に気力充実の面で若干の不満を感じた。今後の努力を乞う。

得点差が示す如く各大学のチーム力が接近している事は特筆される。それだけに松山のインカレがみものとなろう。(田中秀夫・関東学連理事長)

2部は慶応が全勝

▽男子2部

日　大 14—9 防衛大
武蔵工大 19—8 順天堂大
国士館大 12—10 明星大
防衛大 26—21 国士館大
慶応大 16—8 武蔵工大
日　大 13—11 明星大
武蔵工大 18—14 国士館大
明星大 14—13 順天堂大
慶応大 23—17 防衛大
国士館大 15—13 順天堂大
慶応大 18—9 日　大
防衛大 17—10 武蔵工大
慶応大 20—18 順天堂大
国士館大 23—18 日　大
明星大 20—11 防衛大
明星大 17—15 武蔵工大
慶応大 19—14 国士館大
順天堂 28—16 日　大
慶応大 20—19 明星大
順天堂大 15—10 防衛大
日　大 20—13 武蔵工大

▽最下位決定リーグ

順天堂大 32—13 防衛大
順天堂大 17—13 武蔵工大
武蔵工大 24—18 防衛大

この結果防衛大の最下位が決定

【後記】慶応が奮起して全勝で優勝を決めたのは立派である。慶応、日大の上位は別として下位の順天、武蔵工大、防衛大が各2勝を上げながら最下位決定戦にまでつれこんだのはやはり実力伯仲といえるであろう。(田中)

▽男子3部

東　大 21—5 千葉工大
東京学芸大 26—10 東京理科大
関東学院大 25—8 上智大
関東学院大 24—9 東京理科大
茨城大 9—5 千葉工大
東　大 24—3 上智大
千葉工大 12—11 関東学院大
東京学芸大 24—5 上智大
茨城大 32—11 東京理科大
東京理科大 8—7 千葉工大
東　大 16—13 茨城大
東京学芸大 15—14 関東学院大
東　大 12—8 関東学院大
東京学芸大 15—13 茨城大
千葉工大 15—5 上智大
東京理科大 14—7 上智大
茨城大 16—12 関東学院大
東京学芸大 11—9 東　大
茨城大 17—16 上智大
東京学芸大 19—15 千葉工大
東　大 34—13 東京理科大

【順位】①東京学芸大6戦全勝②東大5勝1敗③茨城大4勝2敗④関東学院大・千葉工大・東京理科大⑦上智大

▽男子4部

千葉商大 22—18 東京都立大
明治学院大 34—13 東京農工大
東海大 25—19 山梨大
山梨大 13—10 東京都立大
横浜商大 28—13 東京農工大
東海大 13—11 千葉工大
明治学院大 20—13 千葉商大
東京都立大 25—14 東京農工大
横浜商大 23—17 山梨大
明治学院大 20—10 東京都立大
東海大 27—13 横浜商大
千葉商大 26—12 東京農工大
千葉商大 17—13 山梨大
東海大 12—10 東京都立大
明治学院大 22—11 横浜商大
山梨大 37—12 東京農工大
明治学院大 16—11 東海大
横浜商大 32—14 東京都立大
明治学院大 15—12 山梨大
千葉商大 24—17 横浜商大
東海大 20—17 東京農工大

【順位】①明治学院大6戦全勝②東海大5勝1敗③千葉商大4勝2敗④横浜商大⑤山梨大⑥都立大⑦東京農工大

【後記】3部は東京学芸大、東大、茨城大など、かっての一部校が攻守にまとまりを見せていたものの全般的に得点力の弱さが目立った。4部は、明治学院大が組織的なプレーで他を大きく引き放して全勝したのは順当なところだろう。3部昇格も遂げたがかなりやれそうである。

新加盟に張り切る7校が、それぞれ持ちあじを活かし予想以上のレベルを示したのは、関東学生界にとって、まことにうれしいことだった。

秋季までにいちだんの向上を期待したい(須賀通夫・関東学連委員長)

東女体大、前半の健斗及ばず

▽女子

日体大 棄権 国士館大
日女体大 棄権 国士館大
東女体大 20（13—4 7—2）6 日女体大
東女体大 棄権 国士館大
日体大 28（13—2 15—2）4 日女体大
日体大 18（7—4 11—7）11 東女体大

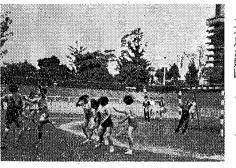
得	【日体】		【東女】	得
0	小野里	GK	阿久沢	0
0	秋間			
3	川口	FP	熊谷	2
1	原		浅見	1
2	沢谷		川端	1
0	中村		姫野	1
2	津熊		中島	1
8	石井	(主審 池田)	大谷	2
1	永田		谷口	1
0	藤田		高橋	2
1	古川		関	0
18	(2)	7MT	(2)	11

【順位】①日体大3戦全勝②東女体大2勝1敗③日女体大1勝2敗④国士館大棄権（3敗）

【後記】女子は国士館大、東京学芸大が不参加のため「3校リーグ」へと逆戻りしてしまったのは淋しかった。

しかし、試合の方は活気があり特に優勝をかけた日体大—東女体大（写真）は、前半21分まで互角に進み好試合だった。

日体大は4—4から残り4分間に3点を連取して優位に立ち、後半も川口、石井の活躍を中心に、疲れのみえた東女体大陣をはげしく攻めたてて加点、8分12—4と開いて勝負を決めた。

東女体大も力いっぱいの試合ぶりを見せたが、この一戦ではスタミナ不足が敗因。スピードプレーの習得も必要ではないか。

日女体大は平林につづく選手の得点力養成が望まれる。

なお、秋季から東京教大の新加盟が予定され今春不参加の両校も復帰する準備を整えており初の「6大学リーグ」が実現しそうだ。（須賀）

中京大、抜群の攻撃力示す
女子も中京大 名古屋大の追撃及ばず

東海

東海学生春季リーグ戦は4月27日開幕。名古屋の天神山コートと名大球技場などに男子は1部6、2部5、新設の3部には4校が参加して行われた。

その結果、予想通り中京大が抜群の攻撃力を示して全勝、2シーズン連続通算17回目の優勝を遂げた。

2部は岐阜大が1敗しながらも優勝。3部は新加盟の名古屋学院大が3勝をあげて1位となった。

女子は、松阪女短大（三重）の棄権から中京大—中京女大が2回戦を行い、1勝1敗となったが、得点合計23—19で中京大が上位と決まり、4シーズン連続5回目の優勝を飾った。中京大の男女制は2シーズン連続4回目。

▽男子1部

名古屋大 34（21—7 13—7）14 南山大
愛知教大 19（9—8 10—6）14 名城大
中京大 46（23—6 23—4）10 中部工大
名古屋大 24（10—12 14—5）17 名城大
愛知教大 26（13—5 13—3）8 中部工大
中京大 22（11—7 11—5）12 南山大
南山大 13（5—6 8—7）13 名城大
引き分け
名古屋大 33（19—6 14—4）10 中部工大
中京大 32（18—7 14—8）15 愛知教大
名城大 30（19—4 11—9）13 中部工大
愛知教大 17（9—6 8—4）10 南山大
中京大 23（12—8 11—7）15 名城大
名古屋大 20（10—5 10—5）10 愛知教大
中部工大 28（17—11 11—7）18 南山大
中京大 24（14—7 10—5）12 名古屋大

【順位】①中京大5戦全勝②名古屋大4勝1敗③愛知教育大3勝2敗④名城大1勝3敗1分⑤中部工大1勝4敗⑥南山大4敗1分

▽同2部

愛知大 13—11 名古屋工大
岐阜大 18—16 国立三重大
岐阜大 37—10 静岡大
国立三重大 19—13 名古屋工大
愛知大 16—15 静岡大
岐阜大 22—12 愛知大
名古屋大 20—13 静岡大
静岡大 14—9 国立三重大
国立三重大 19—13 愛知大
名古屋工大 19—16 岐阜大

【順位】①岐阜大3勝1敗②国立三重大2勝2敗（得点62、失点85）③名古屋工大2勝2敗（得63、失60）④愛知大2勝2敗（得54、失67）⑤静岡大1勝3敗

▽同3部

滋賀大 25—17 県立三重大
名古屋学院 27—9 大同工大
名古屋学院 23—22 県立三重大
大同工大 16—16 滋賀大
引き分け
県立三重大 19—13 大同工大
名古屋学院 16—14 滋賀大

【順位】①名古屋学院大3戦全勝②滋賀大1勝1敗分③県立三重大1勝2敗④大同工大2敗1分

（注）今春から復帰が予定された名古屋市立大は不参加だった。

▽女子（2回戦制）

中京大 13（5—3 8—4）7 中京女大
中京女大 12（6—5 6—5）10 中京大

（注）2試合の得点合計中京大23—19中京女大で①中京大②中京女大の順と決まった。

【後記】男子1部は中京大が全日本学生界でもトップクラスと目される攻撃陣を布いて、予想通りの試合ぶりをみせた。高見、黒川を中心に一気の速攻と、セットからの多彩な変化は抜群でほとんどの試合、前半で大勢を決めた。

昨春の優勝以来、春には自信をもつ名大はエース加藤広をもりたてて、中京大に優るとも劣らぬ試合内容を示したが、中京大戦ではやはり相手に一歩をゆずらざるを得なかった。

3位以下では名城大の健斗がめだった。

2部は1部復帰を狙う各校の混戦になったが、前半戦で手固く勝ち星をあげた岐阜大がトップに立った。新発足の3部は名古屋学院大が初参加とは思えぬまとまりのある攻守で全勝した。今後の成長を期待してよいだろう。

女子は2校の参加という淋しさで急きょ2回戦制とした。実力伯仲だけに勝負は五分となり、得点差で中京大が辛勝。両者の激突による互いのレベルアップが、打倒関東へつながることを期待したい。

なお、今季リーグ戦に名古屋市立大（男）、松阪女短大が不参加となったことは、かえすがえすも残念である（的場吉憲・東海学連副委員長）

岡山大、山口大降し優勝
精彩欠いた名門・広島商大

中四国

中四国春の学生リーグ戦は5月18日（山口大教養部体育館）、19日（同経済学部球技場）に1部5、2部5校が参加して開かれた。

1部は、各校とも決定的な力に欠けたが、岡山大がソツのない試合ぶりで制勝、2シーズン連続4回目の優勝を飾った。かって常勝を誇った広島商科大はまったく精彩を欠き最下位に落ちた。

2部は全勝チームのない混戦となり最終戦で近大呉工学部が大差の勝利を得たため、3勝1敗の同率ながら広島工大、愛媛大をおさえ首位となった。（後記は次号）

▽1部

岡山大 16（8－4、8－4）8 広島商大

広大福山 13（4－5、9－6）11 山口大

岡山大 17（10－7、7－8）15 松山商大

広大福山 13（6－6、7－7）13 広島商大
引き分け

山口大 18（9－1、9－3）4 松山商大

山口大 15（8－3、7－2）5 広島商大

岡山大 14（5－5、9－5）10 広大福山

松山商大 17（8－3、9－0）3 広島商大

松山商大 20（8－9、12－7）16 広大福山

岡山大 14（4－5、10－4）9 山口大

【順位】①岡山大4戦全勝②山口大2勝2敗（得53、失36）③松山商大2勝2敗（得56、失54）④広島大福山1勝2敗1分⑤広島商科大3敗1分

▽2部

愛媛大 14－4 山口大工学部

近大呉工学部 16－12 広島工大

愛媛大 14－12 広島大

近大呉工学部 15－10 山口大工学部

広島工大 15－9 広島大

広島工大 13－8 山口大工学部

愛媛大 15－12 近大呉工学部

広島大 13（分）13 山口大工学部

広島工大 24－12 愛媛大

近大呉工学部 22－5 広島大

【順位】①近畿大呉工学部3勝1敗（得65、失42）②広島工大3勝1敗（得64、失45）③愛媛大3勝1敗（得55、失52）④山口大工学部3敗1分（得35、失55）⑤広島大3敗1分（得39、失64）

鹿児島大の進境めだつ
新進・久留米商大も善戦

九州

第6回九州学生選手権は5月18、19の両日、東海大学体育館に11校が参加してトーナメントにより争われた。

その結果、予想通り福岡勢3校と鹿児島大がベスト・フォアに勝ち残り、決勝は昨年と同よう西南学院が九大を圧倒、前半で大差をつけ、後半も鋭い攻守で快勝、5連勝をとげた。（後記は次号）

▽1回戦

長崎大 24－15 福岡教育大

九州産業大 30－13 宮崎大

熊本商大 16－9 福岡工大

▽準々決勝

鹿児島大 25（11－6、14－3）9 久留米工大

九州大 13（4－3、9－5）8 長崎大

九州産大 26（11－2、15－8）10 東海大

西南学院 11（6－4、5－5）9 久留米商大

▽準決勝

九州大 13（7－3、6－8）11 九州産大

西南学院 12（7－6、5－4）10 鹿児島大

▽3位決定戦

九州産業大 14－11 鹿児島大

▽決勝

西南学院 24（10－3、14－5）8 九州大

西南、福岡学生リーグ戦にも優勝

福岡学生春のリーグ戦は4月28日から5月5日まで、新たに久留米工短大を加えた県内の7大学が参加して福岡工大体育館などで開かれ、西南学院大がバランスのとれた攻守で全勝、昨秋九州産業大に奪われたタイトルをとり返し初優勝した。

【順位】①西南学院大6戦全勝②九州産業大5勝1敗③福岡工大4勝2敗④九州大3勝3敗⑤久留米工短大2勝4敗⑥福岡教育大1勝5敗⑦東海大6敗

九州学連の日程

▽第1回西部学生選抜選手権（6月7日・熊本）

▽第18回西部日本学生選手権（6月8、9日・熊本）▽福岡学生秋季リーグ（11月17・23・24日未定）

▽第18回九州地区大学体育大会ハンドボール競技（11月下旬または12月上旬・未定）▽第9回西日本学生王座（未定）

関西（速報）

関西学生春季リーグ戦は5月26日閉幕しましたが、本誌〆切り後のため詳報は次号に掲載します。同志社大が安定した攻守で2シーズンぶり13回目の優勝を飾っています。上位3強の対戦記録と1部順位は次の通り。

同志社大 18（9－9、9－5）14 関・学

同志社大 12（7－5、5－6）11 関西大

関学 23（10－8、13－6）14 関西大

【順位】①同志社大5戦全勝②関西大3勝2敗③関学2勝2敗1分④桃山学院大2勝2敗1分⑤大阪経済大2勝3敗⑥京大5敗

関東学生各部入れ替え戦

▽1・2部

東京教大（1部）27（11－5、16－8）13 慶応大（2部）

▽2・3部

防衛大（2部）20（11－2、8－6）8 東京学芸大（3部）

▽3・4部

明治学院大（4部）17（9－4、8－3）7 上智大（3部）

球界パトロール

台湾にハンドボールの芽ばえ

早大OBの宋氏らが尽力

▽……現在、アジアでハンボールを実施し、IHF（国際ハンドボール連盟）に加盟しているの日本のほか韓国とイスラエルだけ。中共はIHFに未加盟だし、北朝鮮も実施されているらしいという程度で確たる情報はない。

イスラエルも、その活動はすべてヨーロッパで記されており、実質的には日本と韓国の二ケ国といってさしつかえない。

▽……そのような折、台湾（中国民国）にハンドボールの芽が育ちはじめているというニュースがもたらされ関心を集めている。

ハンドボールの体育的効果に着目した台北市政府が、二〜三年前から、国民学校（日本の小学校にあたる）の教材に採用しようとしたのがはじまりで、今では台北、台中などの四〜五十校が〝新しいスポーツ〟として親しんでいるという。

▽……この運動の推進にあたっているのは、台北市政府教育局の陳団成氏や、台北の中学校教官・宋丙堂氏らで、宋氏は戦前、早大の名バックスとして関東学生界で活躍、日本球界の大先輩の一人に数えてよい人である。

台湾の動きが日本に知らされたのは11人制時代に育った宋氏が、7人制主体化の詳細を、同窓の宮崎慎六氏（早大OB、前日本協会常務理事）へ問い合わせて来たことがキッカケになった。

▽……宮崎氏は、昨春商用で訪台した際に、日本の現行ルールブックやボールを持参し、宋氏らと会って内外ハンドボール界の近況を伝えた。たまたま国民学校の対抗戦があり、こわれるままにレフェリーをつとめ、試合後、現地の先生からルールや戦術について質問攻めにあったという。

宋氏たちの話によると、今年から義務教育になった中学校でもハンドボールを採りあげようと二・三の学校がすでにテストしており、また軍隊も〝正課〟として実施する考えがあるという。軍事下の同国だけに軍隊のスポーツとなれば、普及も急ピッチで進められよう。

▽……宮崎氏は『国民学校の試合といっても、選手は立派なユニフォームや上下揃いのトレーニングシャツを着て、対抗意識もものすごい。親もたいへんな熱のいれようで先生たちも情熱的だ。

宋氏のほか、東京教育大に留学していた温氏などもハンドボールをよく知っている。全国的な協会組織を作って、IHFに加盟したらどうかと話してきた。

日本、韓国それに台湾で一日も早く、アジアのハンドボール界が確立されるよう大いに期待したいものです』といっている。

関東学連 30周年を迎う

～ その発展を顧みる ～

【戦前のライバル慶応(左)―日体戦（昭14春のリーグ戦から)】

○……日本ハンドボール界のトップゾーンと自他ともに許す関東学生ハンドボール連盟の設立は昭和13年5月5日。第1回リーグ戦（正式名称は東京学生春季送球リーグ戦）は同5月22日から文理大（現・東京教大）、日体、明治、慶応、早稲田の5大学が参加して開かれた。もちろん11人制で学習院大、体研、文理大などのグランドを転戦した。

記念すべき第1戦（5月22日午後2時、於学習院）の記録をかかげておこう。

文理大 6（5―1 1―2）3 日体

	【日体】	【文理】
GK	徳永	古垣
FB	菅、陳	伊藤、中島
HB	洪、中島、金	高橋、斎藤、崔
FW	文、南、崔、馬場、和田	守井、中川、大津賀、丸岡、出雲
FT	10	16

▽主審　外山（慶応）

○……後年、質量ともに多くの選手、指導者を輩出、球界の二大主流を形成した教育大（文理大）と日体の両校が、奇しくもリーグの緒戦をつとめたのは因ねんめいたものを感じさせる。

第1回のリーグ戦は文理大が4戦全勝して〝初の優勝校〟の栄光に浴した。各校とも本格的なハンドボールプレイヤーは皆無といってよくバスケットボール、ラグビー、サッカー、水球、陸上、野球、体操などからの転向組で固められていた。

設立当時から球界の中心

○……日本協会が設立されたのは昭和13年2月2日だから、関東学連はこれに遅れること3ヶ月、ほとんど同時といってもよいだろう。日本のあらゆるスポーツ界がそうであるように、ハンドボールの場合も、その創始期の中心は東京の大学勢であった。

関東学連の発起校であり、初代メンバーである5大学は、各校単位で、日本協会の加盟団体として取り扱はれ、当時の関係者に聞くと『日本協会イコール関東学連といってもよかった』そうだ。

しかも、出来たばかりのクラブとあって各校ともOBは一人もなく、審判をはじめ試合の運営は一切、現役の学生が担当した。

関東学連は、全日本学連も併称、第1回リーグ戦のプログラムを見ると「主催・日本学生送球競技連盟、後援・日本送球協会」とある。

○……昭和13年秋、バスケットボール出身者を主力の明治が文理大から優勝を奪ったものの、これも一シーズンで首位を日体に明けわたした。

日体は、かなり早い時期からハンドボールの体育的、教育的効果に注目し、その研究に熱意を持っていただけに、その戦術も、他校の内容とはかなり異なり、ひとたび王座につくと圧倒的な強味を示し、昭和14年春から4シーズン連続全勝優勝という快記録をうちたてた。日体の「第一次黄金時代」と呼ばれる時期である。

日体を追った慶応、早稲田

○……打倒日体に、文字通り必死となったのが慶応である。

猛練習に明けくれた成果を、まず16年春の日体戦で実らせ、同秋ついに全勝優勝、17年春もその堅陣はゆるがなかった。

現関東学連会長西敏郎氏は当時の慶応主将だが、その頃の慶応の勢いをみて、これが同校の最初で最後の〝全盛〟になろうとは誰も想像できなかったであろう。最近の低迷から慶応が一日も早く脱して欲しいものだ。

○……慶応の好調に対し、何よりも斗志を燃やしたのは早稲田である。昭和15年夏の早慶滞同朝満遠征第2戦で早稲田は、はじめて慶応を破ることができ、それが大きな自信となって、その後の躍進へつながる。

日体を倒そうとした慶応、慶応を破ることを無二の目標とした早稲田、両校の追撃を突きはなし王座を死守しようと努力した日体…。異常なまでのこれら三校の執念が、誕生間もない日本のハンドボール界の前進にどれだけ貢献したかは計り知れぬものがある。

新しいスポーツ・ハンドボールにかけた情熱のそれは一つの現れといってもよいだろう。

15年秋から法政が新加入、16年からは明治も定着して「六大学リーグ」へと成長、関西側でも二～三校に部誕生の機運が芽ばえたところで、第二次世界大戦がはげしくなり、リーグ戦をはじめ一切の活動が休止となったことは、かえすがえすも残念であった。

終戦と同時に再建へ

○……終戦の昭和20年、健在の関東学生OBと東京に残った現役学生が日産球技場で開いた〝試合〟は球界復興を告げるたくましい第一声であった。満足な用具もなく、ラインも荒縄を五寸釘で止めて引いた。しかし、自分たちの手で日本ハンドボール界を再建しようという意気がすべてを超えた。

この努力が、21年6月、早くもリーグ戦を復活することに実った。参加したのは戦前と変らぬ6校。11人を揃えるのがやっというチームもあったが、どの顔も明かるくはずんでいた。

同年秋に中央が、22年春に立教

が加盟したのも学連を元気づけるのに大いに役立ち、22年秋からは一部5、二部5校の二部制となった。

また、戦時中、奨励種目として残った女子のうち日体、音体（現東京女体大）、埼玉師範、東京第一師範（現・東京学芸大）などがそのままチームを存続させ、女子リーグを組織したのも朗報であった。戦火の中から立ちあがって二年足らずのうちに加盟校の増加や女子の部が設立されるなどとは夢のようなことであった。

関西学生界との交流

○……一方、関西側でも大阪歯医専、関学などを中心に、学生界の確立が急ピッチで進められ、たがいに手をたずさえての発展が必要とあって、21年11月に、早大が関学と定期戦を結んだのを皮切りに、21、22年の国体で、東西大学優勝校対抗を企画、2年連続して早稲田と大阪歯医専が顔を合わせた。

さらに、23年に入って、全日本学生ハンドボール連盟の結成が具体化、同年秋、西宮球技場で、「連盟結成記念シリーズ」が開かれ、これを機に王座決定戦、東西対抗などが行われるようになった。

余談になるが、戦前の全日本学生連盟は、前述のように関東学連が併称していたもので、特に全国的な活動はなかった。17年11月、訪日ドイツ艦隊と対戦した全日本学生も、全日本とは名乗っていたものの、関東学生選抜であった。

史的にみて、名実ともに備った全日本学生連盟の設立は、23年11月といってよく、さらに全日本学生選手権（インター・カレッジ）の始められた33年度から、本格的な〝全国組織〟になったわけである。

駒沢をホームグランドに
早稲田の活躍めだつ

○……さて、一・二部制となった関東リーグは、終戦後6シーズンに早稲田が3回、明治、文理大が各1回、そして早・文・日体の同率優勝が1回という力の配分となり、23年秋の勝者・文理大は、関学を降して初の学生王座校となった。特記されるのは23年秋に高専リーグを併設し、日体が転籍、各校の予科がこのリーグに加ったことだろう。日体は翌年から一部に復帰した。学制改革などがあって24、25年は再び一部制（8校）、25年春は立教が首位となり戦後の加盟校から初の優勝校が生まれた。25年秋は早稲田と教大が6勝1敗の同率で、初めて優勝決定戦が行われ早稲田が勝った。

26年は立教、27年は日体、28年は早稲田といずれも春秋優勝を飾る安定した戦力を誇ったが、学生王座は、第2回（昭24）以後、関学の独走を甘受、第7回（昭29）まで6連敗を喫した。

関学の王座6連勝は不滅の記録として、今後も残ることだろう。

○……24年の東京国体を機に駒沢（東京都世田谷区）にハンドボール場が建設されたことは、関東学連にとって大きなニュースであった。

それまでのリーグ戦は、各校のグランドを転々、ホームグランドの確保が望まれていたもので設立以来の宿願がかなったといってもよいほどだった。

組織上の変化としては、25年秋に新制大リーグを併設したこと、26年春から二部制を復活したこと、29年に早慶明立法教の脱退があったことなどがあげられる。

新制大リーグは、25年度に加盟を申しこんだ芝浦工大、東大、山梨大、同分校の4校によって行われたものである。今や最上位に名を連ねる芝浦工大のスタートが、ここからであったことを知るファンは少いだろう。芝浦工大と東大は翌26年から二部へ編入された。

29年の6大学脱退は、球界ばかりではなく、国内スポーツ界を騒がせた。理由はいまだにいろいろと取り沙汰されるが、どれが真相というほどの確証は筆者にもない。

「関東」「東京6大学」の二リーグ併立が、おたがいの中味をうすくさせたことだけは事実である。両者は30年秋に合体した。

○……29年春からは、日体が「第二次黄金時代」を築いた。31年春まで5シーズンに連続優勝、30年には学生王座を関学から奪った。

また、全日本総合、全日本室内などでも日体系チームがタイトルを握り、戦前をしのぐ栄光に輝いた。

この日体にストップをかけたのが芝浦工大だ。

芝浦工大時代が開幕

○……29年春、一部昇格を果した芝浦工大は、シーズンごとに力をつけ31年秋ついに日体の牙城をくずした。しかも、その年の王座に快勝、32年春のタイトルこそ日体に取り返されたものの、同秋から〝無敵〟の名を欲しいままにする快進撃を示し「芝工大時代」を築くことに成功したのである。

芝浦工大が、最初に優勝を飾った31年秋から今春までの11年半の

関東学連各校加盟年度

校名	加盟年度
慶応	昭13春
日体大	〃
東教大	〃
明治	〃
早稲田	〃
法政	昭14秋
中央	昭21秋
立教	昭22春
水戸高（茨城大の前身）	昭22秋
第一師範（東京学芸大の前身）	昭22秋
芝浦工大	昭25秋
東大	〃
山梨大（26春から不参加，昭43春復帰）	〃
茨城大	昭26秋
関東学院（一時不参加，昭39春復帰）	昭30秋
防衛大	昭31秋
順天堂	昭32春
東京学芸大	〃
千葉大（現在不参加）	〃
武蔵工大	昭34春
千葉工大	昭36春
日大	昭36秋
東京理科大	昭38春
上智	昭39春
国士館	昭40春
明星	昭41春
都立大	昭43春
明治学院	〃
東京農工大	〃
東海大	〃
横浜商大	〃
千葉商大	〃

【女　子】

校名	加盟年度
日体	昭21秋
音体（東京女体大の前身）	〃
埼玉師範	昭21秋
第一師範（東京学芸大の前身）	昭21春
日女体大	昭36秋
東京女体大	昭38秋
国士館	昭41秋
東京学芸大	〃

（注）東京教育大は加盟当時は「文理大」と呼称

間、掌中におさめた主なタイトルは次のとおりである。

▽全日本学生選手権　8回▽全日本学生王座　8回▽東日本学生選手権　9回▽関東学生　15回▽全日本総合　3回▽全日本選抜　4回（芝工大2、全芝工大2）

○……関東学生優勝15回のうち、32年秋から36年秋までは9シーズン連続の快記録で、他校で一矢をむくいたのは、34年春の明治だけ。この時は、両校6勝1敗で同率優勝となったが、明治にとっては、21年秋以来13年ぶりの〝1位〟であった。因みに芝浦工大の1部における成績は現在まで一七九戦一五六勝二三敗、勝率八割七分という驚異的なものだが、記念リーグの今春、初の負けこしを記録したのは皮肉だ。

○……連盟自体としては、31年秋に来日した西ドイツと対戦するため全日本学生（第1戦・横浜）、関東学生（第7戦・甲府）を編成、36年10月には日体大が韓国遠征、38年1月スウェーデンで開かれた第1回世界学生選手権には全日本学生として関東学生界からは安達、与縄、中根(立教)、谷（芝工大）、坂井（中央）、諏訪（慶応）、藤原（日体）、田口（法政）、の8人が出場。さらに38年6月には韓国学生選抜の来日で全関東学生（第3戦・東京）が対戦するなど国際的な動きが目立つようになった。

なお、31年秋には、早慶明法が2回目の脱退という事件がおき、32年春には立教も脱け再び二リーグ併立となり、5校の日本協会除名という問題にまで発展したが、33年秋、合流が成った。

○……その後は加盟校も順調な伸びをみせ24年春から中断していた女子リーグが36年秋に復活、男子は38年から3部制となり、この年から毎春、新人戦も開かれるようになった。

明かるい話題の中で37年秋、駒沢が東京オリンピック工事のため、使用不能となった痛手は大きく、会場難からリーグ運営のピンチを招いた。39年秋から駒沢に戻ることができたものの、全面的優先とはいかず、ウィークデーに日程を組むなど苦しい面もあり今後もこれは大きな課題として残ろう。

立教、鮮やかな復活

○……芝浦工大の独走を、37年春には日体が、七人制に切り替はった38年春には立教がそれぞれ阻止したが、秋はいずれも芝浦工大に名を成さしめ、39年は芝浦工大の完勝となった。40年も春は立教、秋は芝浦工大と動かず、芝浦工大は秋季リーグに10連勝をマークした。

しかし、41年に入ると、立教がユニークなセットプレーを完成、春につづいて秋も全勝。全日本学生王座にも勝った。25、26年頃を第一次とすれば、立教にとってこれは「第二次黄金時代」の幕あけといえよう。

好調の波にのる立教は、42年も春、秋に連勝したほか、全日本学生、同王座、東日本学生の学生5大タイトルを独占した。二部に呻吟していた頃を思えば、立教のカムバックはあざやかといえる。

○……一方、女子は日体が、圧倒的強さで他校を退けて連勝。

実業団充実の昨今、学生界の勝者が全日本のナンバーワンというわけにはいかないが、歩一歩、目標へ近づき、今年に入って東京女体大が進境を示し両校によるその期待が高められている。

球史とともの酒井早大部長

○……ところで、初代理事長松本良三氏（当時慶大部長、本誌〝日本ハンドボール協会創始期の思い出〟執筆者）にはじまって現理事長田中秀夫氏（中大監督）にいたるまで、関東学連の運営にたずさわったＯＢ理事や学生委員は30年間で延べ五百人をこそうが、何をおいても特筆したいのは、早大部長酒井賢治教授のことである。

酒井教授は13年4月25日部発足と同時に部長に就かれて以来、実に30年間そのポストをつとめられている。

他校の部長が二度三度と代っているなかで、30年一途に母校のハンドボール部のためにつくされた功績は筆舌につくしがたいものがある。現在関東学連顧問もつとめられているが、このような情愛深い部長をいただくことは、早稲田大ばかりではなく、関東学連にとっても誇りあることといえよう。

○……このような球史を経て今日にいたった関東学生ハンドボール連盟は、今春から春から男子は4部制が採られ、1部8校、2、3、4部は各7校。女子5校の合はせて34校を傘下におさめる大世帯に成長した。

わずか5校で発足した30年前を憶えば、その発展を喜び、誇ってよいだろう。

しかし、安心してはいけない。発展、向上の道は無限なのである。ましてやミュンヘン・オリンピックを前に、学生界に課せられた責任は大きい。

この期待に応えるには、ＯＢ、現役一体となってこれまで以上の情熱と努力を傾けることが必要なのだ。

30年間の月日に刻みこまれた先輩の業績を、いっそう輝やかしいものにするかどうかは、これからの一日々々にあるといってよいだろう。いっそうの精進を願って結びとしたい。【文責・編集部】

日本ハンドボール協会創始期の思い出（5）

松本良三

外山准二氏の功績

年と共に協会も漸く陣容を整え世間にも知られて来た。ハンドボール誌の編集員杉山茂氏がつい先頃、私に「雑誌の編集上、古い資料を調べるのですが、初期の送球について、割合に新聞記事が多いのに気がつきました。」と言われた。然しそれ等の記事は送球の試合があるからといって取材したものではなく、それ等は凡て外山君が、労をいとわず頼んで出してもらったのである。

送球の為に一番グラウンドを貸して下さったのは、世田谷の日体、早稲田の東伏見、それに慶応の日吉であった。いつのことであったか忘れたが、どうしてもグラウンドの都合がつかず日比谷公園で試合を催した時であったと思う。其日の行事が凡て終ってから、日比谷の陶々亭で、外山君と夕食を共にした。食事を終ってから外山君は「先生、是れから新聞社を一まわりして今日の試合結果を、あしたの新聞に戴せてもらいます。」というのであった。此日は特に施設のない会場の下準備、試合の審判役、後片づけと外山君は一日中働き、さすがに疲れた様子であった。送球の為には何等の個人的野心もなく、献身的に努めた氏であるが、此時ばかりは師弟の博、胸に迫って、全く外山君に気の毒に思った。人は多いが為になる人というのは尠いものである。外山君は、協会の為に、是れはと思うことは必ず目的を遂てくれた。

日本にハンドボールを紹介したのは、先に述べた通り、大谷氏であり、又戦後、出現した式場、高嶋体制に於て式場会長の広い社会的つながりと高嶋理事長の果敢な理事長振りが日本のホンドボールを今日の隆盛にしたのは一般に認める所であるが、此繁栄の礎石を築いたのは、平沼、永井両会長の下に前後十数年に亘る忠実な外山氏の努力に因るものである。外山氏なかりせば日本にハンドボール無しと言っても決して過言ではないと思う。

神宮大会と送球協会

扨て、此時分、外山君が明けても暮れても口にしたことは協会が陸聯から離れ、独立団体として明治神宮体育大会に参加することであった。

そして、私としては、事ある毎に体育協会の会合に顔を出し、じわり、じわりと目的貫徹の為に働きかけた。そしていよいよ昭和十五年の紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会に送球協会は、独立団体としての参加を許された今、手許にある資料により此間の経緯の極めて枢要な点を「報告書」原文の儘、稿録することにする。

（1）第九回明治神宮体育大会報告書。

一六、七四、三九七頁。注目されたのは新種目の送球と重量挙で、送球では大塚倶楽部が優勝。

四三七頁。　送球競技　竹田德二

日本陸上競技聯盟では送球競技の発達を企図し、七月代議員総会に於て聯盟の援助により独立せしむることを議決し、聯盟内に送球創立準備委員会を設置し平沢亮三氏を委員長に大谷武一、中園進両氏を始め十数氏を委員に任命せり。

其の後同委員会では送球競技規則の研究制定、協会規約の草案、普及奨励方法等の研究を行い、第九回明治神宮体育大会に於て送球競技大会を実施し以て送球競技に関する規則等の確立を期すべしと決し、明治神宮体育会に対し日本陸上競技聯盟より正式種目として第九回大会に実施方慫慂することとなり、陸聯代表下村広次氏より神宮体育会に提案方依頼し、九月下旬開かれる明治神宮体育会評議員会に於て「陸上競技の内部種目として実施を認む」と決定せり。

競技は十月一日第一試合午前九時より、第二試合午前十時半より、三位決定試合午後一時より、決勝午後三時より体育研究所に於て、左の如き組合せにて行い、其の結果大塚倶楽部優勝せり。

- 慶応H・B・C
- 大塚倶楽部
- 青山師範送球部
- 日体送球部

（2）第十回明治神宮国民体育大会報告書。

一四頁。即ち重量挙及び送球は何故に之を各独立の種目として認めざるやの質疑がありまして、之に対し運動種目は前回の第九回大会の際の二十三の種目に関し検討を加えて決定しました。而して送球は前回には陸上競技の種目中に重量挙は体操の種目中に加はって居りますので、特別委員会と致しましては此等は細目に渉ることでありますので実行委員会で適当に処理せしむるを便とすと決定致しました。

七二頁。送球部役員

（顧問）松本良三、中園進、浅野均一、塚本簫之助、杉浦卯三、保坂周助、塩沢幹、酒井将、細川熊蔵、酒井賢治、松岡一雄、池上金治。

（会長）平沢亮三（役員長）大谷武一。（接待員）中園進、池上金治、外山准二、近藤憲弘。（審判）（長）松本良三、池上金治、外山准二、宋丙堂、菅公。（進行係）保坂周助、入江信太郎、山田栄二（計時係）角正己、林大、肥後淑人、桜井明。（記録係）橋本栄治、近藤憲弘、小田切礼二、広井。

二四七頁。　感想　松本良三

興亜の聖業今や酣にして国民体育の高大なる弥が上にも緊迫を告ぐる此際に、第十回明治神宮国民体育大会催され、送球競技も奉納の機を与えられたるは無上の光栄とする所であった。即ち当局所定の方針に従い、陸上競技の一部として大学高専選抜二チームを送り、十月三十一日午前八時より同九時三十分を期して紅白試合を行った。此選手選抜に関しては送球協会に以て慎重審議の上加盟団体たる日本体操学校、慶応大学、早稲田大学、文理科大学、明治大学、法政大学のチームより厳選せるものである。紅軍は監督外山准二、主将角正己以下十五名、白軍は監督池上金治、主将菅公以

下十五名であったが大体今年度リーグ戦優勝校たる日体を白軍の基準と為し、同じく第二位たりし慶応を以て紅軍の中核と為した。而して当日出場せる選手並にポジションは次の通りである。

審　判　外山准二

白軍		ポジション	紅軍	
和田旬功	(日体)	F.W.	肥後淑人	(早大)
山田　計	(〃)		林　大	(慶大)
越智　武	(〃)		西　敏郎	(〃)
田中実夫	(〃)		内藤幸一	(〃)
文　顕柱	(〃)		島田　清	(〃)
林　二夫	(〃)	H.B.	大坪　優	(〃)
菅　公	(〃)		中村恒男	(〃)
前田敏雄	(〃)		飯田徳造	(早大)
川崎久武	(早大)	F.B.	須藤昌彦	(慶大)
広井　喬	(日体)		横山駿男	(早大)
徳永陸繁	(〃)	G.K.	有元正勝	(慶大)

而して試合の結果は白軍十九点、紅軍七点を得て白軍の勝利となった。

当試合を観るに各選手は、その全力を尽し、然も正々堂々たる精神を顕現し、選手相互間の斗技に、又審判の判定に対し、剛毅、服従の念を体し何等見苦しき振舞の如きを見ざりしは一般の欣快とする所であった。然し選抜ティームの欠点たるコンビネーションの不調より来る気合の低調は免れざる所であった。これは予て期したる所であり、これティームの編成に当り、大体に於て日体、慶応の原形を保存せる所以であった。而して白軍即ち日体は優勝校であり且つ外部選手も唯一名を交えたるのみなるを以て、概して連絡よく、又連絡の欠如は駿足なる前衛が敵の虚に乗じ、適宜にドリブルを交えたる個人的突入により補われたのであった。然し紅軍は個人的に進撃するの術に出です、時に不必要に体形を整えて前進するの戦法は、常に敵方をして防備を容易ならしめ、殊にゴールエリヤに近接するや、ショートパス多くして得点の機を逸せること再三でなかった。之は練習不足と称するよりも寧ろ練習過多にして余りに技巧的に走れる慶大ティームの欠点と称すべく、殊に当日バックの連絡悪く、後半は別として前半の如き、時に相手方をして無人の境を行くが如き観を呈せしめた。然し又、紅軍が送球の一特技たるロングパスによりよく場面をウィングに展開して押し進む正攻法に至っては流石に研賛の跡歴然たるものがあった。

猶、当試合に以て見受けたるは、審判が余りに厳正に過ぎたることであった。之は如何なる競技に於ても、その発達の初期に於て見る所であるが、徒らに定義に捉はれたる判定を下すは頻々として試合を中絶する結果となり、選手の意気を粗喪せしむる惧れがある。勿論此問題は軽々に律すべき課題ではないが、当日試合後、審判自身も言える所であるが、「三歩、三秒」の規約或は「十三米スロー」罰則の適用に関しては、更に研究を要するものであろう。

又、個人技としては、紅軍の林、白軍の文は当日の白眉と称すべく、実に興隆以来数年を出でざる我国球界に此種選手の輩出を見たるは斯道の為に慶賀に堪えざる所であり、短期にして斯くも送球の水準を高めたる池上、外山両監督の努力は多とすべきであろう。

最後に送球の神宮競技に於ける地位に就き一言したいと思う。

抑え送球が我国人に認められたるは、一九二八年に、日本陸上競技聯盟の名の下に国際送球聯盟に加入したるに始まる。而して諸先輩は当技が比較的親しみ易く、且全身的発育に資する所大なる点に着眼し、之が普及発達に尽し、大正十五年には既に文部省体操教授要目中に配せられた。次で第十一回ベルリンオリンピックに当り、当技は正式種目として盛らるる等のことあり、我国に於ても之が再認識の議起り昭和十三年二月には送球協会設立せられ、爾後独立団体として全国的活動漸く顕著なるものがあった。然も技術は著々として発達し、勃興の日浅しとも我国輸入以来既に十数年の歴史を有する当技は比較的地方に普及し、正に一般路を為さんとの機に熟し居るのである。

然るに此度、神宮大会に以て送球が与えられたる地位は、旧態依然として他団体の一部門に過ぎざるものであった。およそ物の形式は実在より生まるるものであるが、実現既に整って将に体育を遂げんとするものに、装備の一具を供するは、物の完了を促進する所以であり、激励の放甚大なりと称すべきである。此意味に於て、来るべき神宮大会には我送球競技をして独立団体たるの面目を賦与せられ度く諸賢に仰望して、已まざる次第である。

送球成績

白組 19 (11—4 / 8—3) 7 紅組

【編集部・注】松本氏の文中にある「明治神宮体育大会」は現在は行われていない。〝戦前の国体〟と思えばよい。ハンドボール（当時・送球）は昭和12年（第9回）昭和14年（第10回）のほか、昭和15年（第11回）にも実施されている。

この第11回大会のハンドボールは、昭和12年の時と同じように全日本選手権（第3回にあたる）を兼ねて行われたのだが、特筆されるのは、一般女子と中学男子の初めての全国大会になったということである。

一般男子は、東京の大学勢のほか、静専ク（静岡）、神戸ク（兵庫）、大阪ク（大阪）、茨城師範OBク（茨城）の4チームが地方から出場、〝全国〟大会らしい雰囲気にようやくなった。しかも静専クが緒戦で早大を7—4で破ったのは大きな話題だった。優勝は日体—慶応の宿敵同志の争いになり、日体が13—5で勝ち、全日本選手権2連勝に併せて第11回明治神宮体育大会送球男子部門の優勝ということになった。

初の女子は5チームが出場、岡山から東上した倉敷高女（岡山）が、梅花高女（大阪）を延長の末に破った。

男子が、東京の学生を中心に発展したのと対照的に、女子は大阪、岡山の高女が主体であった。因みに倉敷高女は、17年の第4回全日本選手権にも優勝、戦前のクィーンの座を不動のものとしている。

中学男子は、関東州から遠来の新京商業をはじめ7校が参加、青山師範が5—3で快勝している。一般同よう、中学も第1回全日本中学選手権を兼ねて行われたもので第2回は昭和17年に開かれ豊中中（大阪）が優勝校となった。

なお、明治神宮体育大会はその後も続開されたが、ハンドボールが実施されたのは昭和15年が最後であった。

フランスの技術研究（10）

攻撃の基本は基礎技術に

訳　藤本　強
（日本協会常務理事）

先回は守備のフォーメーションをとりあげ、一応その形を紹介しきた。今回からは4～5回続けて、攻撃のフォーメーションをとりあげ、その後、反撃の際のフォーメーションを見て、本稿を閉じることにしたい。

攻撃のフォーメーション

一般的注意事項

チームがボールをもっている際に共同して行なう動きを戦術といい、その種々の形をフォーメーションと名づけることができるであろう。その究極の目的はシュートをする良好な位置を獲得するところにある。

攻撃のフォーメーションの成否には種々の要素がある。たとえば選手個人の技術、かれらのとる位置、かれらの動き、動きの速さこれらが組み合わされ、組織的な防禦を不可能にしていくのである。基本的要素は次のとおりである。

a　シュートが一番確実なのはエリアラインからであるから、そこをあけるためには、中長距離から得点できるシューターも必要になる。

第一にポストからのシューターと中長距離からのシューターこれを備えることが必要になろう。

b　攻撃には、二つの時期がある準備の時期、ボールを非常に速く右左、あるいはサイドの奥、浮いた選手にと廻し、この時期の最後に徹底的につくポイントを定め、そこから攻撃する。この際には、比較的ゆっくりと動きながら、ボールは速く廻す（このためには、すぐれたボール扱いの技術が必要となる）。この時期は非常に洗練された技術的にも戦術的にも高度のレベルに達しているチームの場合には、しばしばおかないことがある。

次には、攻撃の本領を発揮する時期がくる。この時には、チーム全員が、リズムをもって走り、相手チームの防禦ができないようにしてしまう。全員が走り、ボールを動かすことが肝要となる。

c　大きく拡がって、攻撃すること、サイドの選手は広くサイドの奥までを使い、ポストの選手はエリア際を左右に動き、広く、大きく攻撃する。

d　すべての攻撃には（反撃を除く）、チーム全員が参加する。理想的に云うならば、グランドの全域を使って、攻撃することが望ましい。

e　攻撃は片側のサイドで準備をする。たとえば、まず左サイドに圧力をかけ、防御側を寄せて、すぐに右サイドから決定的なチャンスを得るというように。

f　その上、攻撃には、いくつかの技術がすぐれていなければ、とても戦術はとれない。たとえばフットワーク、キャッチ、パス、シュートといった技術なしでは、戦術にはとてもならない。ここでこれらの技術をも一度ふりかえってみる。

基本的なこととしては、まず相手の側面に位置し、いつでもボールの動きを見ていなければいけない。特に敵、味方の位置、動き、

1

2

3

4

それに伴ったボールの動きは良く遂一もらさず見ていなければならない。とかく完成されている選手は、ボールしか見ていなかったり、相手を見る余り、ボールから眼が離れたりすることがあるが、こういうことは断じていけない。

味方に対しては、たとえボールをもっていなくても、味方を守ることも常に考えていなくてはならない。単にシュートする時にブロックに入るといったような消極的なものでなく、もっと、一つのパス、一つのフェイントといったような時にも、味方の動きを守り、たすけるといった心掛けが必要になる。これも大きな味方への貢献であることにかわりはない。

相手に対しては、攻撃側の選手はあらゆる技術を駆使して、相手を窮地に陥いれるようにしなければならない。

相手を自分にあらゆる手段を使って、ひきつけておくこともチャンスを生みだすことになる（1図参照）。たとえば、その相手をフェイントなり、パスなりで抜くこと、そこにできるノーマクを利用すること、これらすべて、基本的なことになる。それぞれの相手を充分に引きつけておけば、一対一で抜いた時には、必ずノーマークができることになる。

ボールがサイドからサイドに移られた場合でも、相手を引きつけておくことは、非常に効果がある。たとえば図2にあるような形がしばしばでき上ることになる。この際、左サイドの選手は充分にマークを引きつけ、ポストの選手をあけるようにする。

g　一般的に云えば、ボールを自チームに確保しておくため、一番近い味方にパスするのが原則ではあるが、より高度の技術をもったチームならば、より多くの可能性がでてこようし、でなければ、戦術のなりたつ余地がない。

中距離、長距離のパスをどしどし使い、相手にゆさぶりをかけることも、守備陣形を崩す有効な手段になる。

サイドから逆サイドの浮いた位置の選手へ、あるいは逆に、またサイドから逆サイドの選手へというような大きなパスはゆさぶりにはきわめて効果である。この際相手の防御陣の動きには、十分に気を配る必要があるし、タイミング、位置にも気をつける必要がでてくる（3・4図参照）

攻撃の際のボールの廻し方

攻撃はボールがいかに早く廻るかによって左右されるといっても過言ではないほど、ボールの廻し方とゆうのは重要なものである。

右から左、逆に左から右、そのボールの廻る速度が問題になる。

攻撃側の選手はボールを安全にしかも、攻撃のチャンスを作るようにボールを廻す。

この時のパスは指を充分に使い正確に投げなければいけないのは云うまでもない。しかも、時間、場所も問題である。パス一つで生れるチャンスも多々ある。一つのパス、一つのキャッチが新しい場を開いて行くのであるから、パスおよびキャッチがいかに重要なものであるかは判っていただくことができよう。

ボール廻しは個々の選手の技倆と位置によって、いろいろ変ってくる。

浮いた位置の選手は、最終段階（究極の目的であるシュート、得点すること）に至るまで、サイドの選手を含め、ボールを廻し、最終段階のおぜんだてもする。それは9～10ｍ前後ゴールから離れたぐらいの位置で廻すのが普通のようであるが、これより遠い位置のほうが、よりよいように考える。

5～8図に示すように、多くのパスの廻し方が考えられる。

5→6のように、パスをしながら、一人の選手がポストに入っていった場合、多いにチャンスが生れよう。

また7→8の変化もチャンスが生れよう。

ポストに入っている選手もこのボール廻しに参加することが望ましい。常に左右に動き、これに参加できるような位置をとっておくことも充分に考えておく必要がある。

ボール廻しは決っして、どうといった定形的なものがない。とにかく、チャンスの糸口を作りだすことに目的があるのであるから、スピードある正確なパス、場所と時間を考えたパス、それに加えてガッチリした、すばやいキャッチが望まれよう。

また豊富な種類のパスも、相手の眼をごまかすのに使用するのが良い。

とにかくなるべく多くの選手がボール廻しに参加できるようになることが必要である。ポストの選手にボールを入れるのは困難であるが、入ればチャンスになる。これも技術があってはじめてできるのであるから、いかに個々人の技術が大切かが良く判ろう。

6

5

8

7

4期16単位に細分し指導

ステアウア（欧州1位）にみる一流クラブの練習日程

かって世界のあらゆるハンドボールのタイトルを一人じめし、再びそれを狙っている国ルーアニアナショナルチームのコーチであり、IHFの競技委員の一人であるイオン・クンスト氏は、氏のチームであり、氏がコーチするようになってからめきめき頭角を表わしてきたステアウア・ブカレストの年間の練習・試合計画を明らかにした。ステアウア・ブカレストは本年のヨーロッパカップで見事にベードリッヒ・ケーニッヒ氏のチーム、デュクラ・プラグ（チェコ）を決勝戦で破って、優勝している。

今日のスポーツに於いて、計画性のあるトレーニングが必要なのはいうまでもないことであり、またこれなしには、プレーの向上はないと云えよう。

このイオン・クンスト氏のトレーニング計画は一年を試合の時期に合せ、移行期、準備期、試合期、調整期に分け、更にそれをI〜IVまでの2〜4週間を単位にしたものに細かく分け、それぞれ重点的にやるものを決めている。

また各単位は週に分かれ、それぞれの週で、一日一日に目標がおかれるような形になっている。

クラブチームであるので、練習の開始は午後1時半、練習時間は2時間と比較的短時間ではあるが、内容はかなりつまっている。

それに試合の時期であっても、必ず体力面、特に敏捷性の問題には気を配っているのがよく判る。

また戦術面においては、速攻をかけられないように気を配っている。

研究的な練習も数多く見られるし、週の日によって、練習量が強化されたり、ゆるめられたりするのも一つの基準を示すものになろう。

また、個人々の練習も大事であるので、それもおろそかにはできない。週間日程表（次頁）は試合期であるので、体力面の配慮に乏しいが他の期にはもっともっとそれが必要になろう。

国情も違い、このままでは使えはしないであろうが、一年間の計画表、及び週間日程表を掲載し、少しでも日本の関係者に参考になればと思い、これを外誌から転載した。

ヨーロッパのクラブ

ところで、ヨーロッパの一流チームは、ほとんどといってよいほどクラブチームである。

今年のヨーロッパカップに出場した顔ぶれをみても、クラブ以外の代表はフランスのステード・マルセイユ大学だけだ。

日本に来たルーマニア、フランス、西ドイツなどの選手たちは、日本のトップチームが単独大学であり、実業団であるということが、どうもよく判らないらしい。生活様式のちがい、社会機構の相異といってしまえばそれまでだが、誰でも、どこでもハンドボールに親しめるという点では、ヨーロッパのクラブシステムの方がはるかに秀れているといってよいだろう。

東欧諸国のスポーツクラブでは、ハンドボールはメインスポーツの一つに数へられており、少くとも各クラブに2面のコートと2人以上のコーチ（トレーナー）が配属されている。

練習計画の1例

（1966年から67年にかけての計画）

	期間の練習	試合 国際	試合 国内	週	月
I	移行期			3 10 11 17 18 24 25 31	7
II	準備期			1 7 8 14 15 21 22 28 29 4	8
III			練習試合を含めた各種試合		
IV				5 11 12 18 19 25 26 2	9
V	試合期			3 9 10 16 17 23 24 30	10
VI	調整期			31 6 7 13 14 20 21 27 28 4	11
VII					
VIII	試合期		ルーマニア選手権大会	5 11 12 18 19 25 26 1	12
IX				2 8 9 15 16 22 23 29	1
X				30 5 6 12 13 19 20 26	2
XI	調整期			27 5 6 12 13 19 20 25 27 2	3
XII	試合期		各種試合	3 9 10 16 17 23 24 30	4
XIII					
XIV				1 7 8 14 15 21 22 28	5
XV		試合		29 4 5 11 12 18 19 25 26 2	6
XVI	移行期				

（注）週欄の数字は日づけ

クンスト氏は、ステアウア・ブカレストスポーツクラブのハンドボール部門のコーチであり、かつてはダイナモ・ブカレストクラブにあって、そこでの実績が認められルーマニアナショナルのヘッドコーチをつとめた。

昨秋来日した西ドイツのトルカ氏も、本職は公務員だが、朝晩はハンブルグ・スポーツクラブのハンドボールトレーナーとして面倒をみている。

多くのスポーツクラブは、ジュニア、シニア、成年の男女3クラスあわせて6クラスがおかれ、それぞれの国内リーグにも出場している。国によってちがうがだいたい7才ぐらいから入会できる。つまり、希望さえすればその頃から「ハンドボールの一貫教育」を受けることができるのだ。

選手クラスの試合は国内の上級リーグが主だが（注・上級リーグの勝者がヨーロッパカップへ出場）フランスの名門ステラスポーツクラブが、39年に自費で日本遠征したような大がかりなツアー（試合旅行）も時には行われる。

ステアウア・ブカレストの練習日程（成年男子、選手クラスのもの）を紹介したことで日本の関係者は、技術的な示唆とともに、ヨーロッパのハンドボールクラブの一端をうかがい知ることにもなろう。（藤本）

ステアウア・ブカレストの週間トレーニング表　（試合期）

週日	4.18（月）	4.19（火）	4.20（水）	4.21（木）	4.22（金）	4.23（土）	4.24（日）
場所	休息	ゲンセア	同左	同左	同左	休息	試合
時間		16.30～	16.00～	16.30～	16.00～		
目的		体力 戦術	戦術	練習マッチ	体力・技術 戦術		
強度		非常に強く	適度に	強く	強く		
練習時間		120分	120分	120分	120分		
内容		○敏速な行動と耐久力を強化する ○相手をおいた攻撃とすばやく組織的に帰陣し，防御につく ○攻撃の時に守備の研究，特に敵味方の数を見ること ○攻撃動作の強化（敏速性と防禦を破る身のこなし）	○2人をポストに入れた攻撃の研究的練習。種々のバリエーションも行う ○組織的な帰陣の練習相手の速攻の防止 ○20分×2の練習マッチ	○A―B両チームによる練習マッチ Bチームはダブルポストを使い．すばやく組織的に帰陣する ○先回の試合の欠点の補正 ○試合のあと相手をおいた攻撃の帰陣のくりかえし	○次の試合に対しての理論と実際にどのようにプレーするかの反復 ○コンビからのシュートと相手と争いながらのシュートの強化 ○体力・技術・戦術の練習によって防禦力の向上		
特別の内容		ゴールキーパーのトレーニング（反射動作とスタミナ）	ゴールキーパーの体力	種々の角度からのシュート 7mスローを20本ずつ（ヤコブ・グルイア・オテレア）	7mスロー20本ずつ（ヤコブ・グルイア・オテレア）フリースローラインからのコンビによる中長距離シュート		

連載・技術教室 ②

高校クラブは夏までどのように練習するか………〈その考えかた〉

佐 野 和 夫
（日本協会審判委員）

1「目標を持つ」（学校全体の支持を受けた活動）

最初にクラブ指導者が考えるべきことであり、実践しなければならないことは、学校における教育的な面からみた「到達目標」である。それぞれ学校特有の方針を持っているクラブで、指導者がその方針に添わない独走的な指導構想や、活動を行へば、せつかくのクラブが学校から遊離してしまう。

年間を通したクラブ活動は常に全体の方針に則った活動でなければ支持と、援助を得られないし、成果は期待できないといえる。さらに具体化してみると、先述した様な大きな方針と相俟って、「体力、精神力を高めること」、「技術の向上」などがあげられる。そしてこれを満足させるべく活動を行ってきた成果を問う試錬の場として、対外試合がある。

現在、高等学校で最も権威を持って臨む大会が夏に実施されるインターハイであり、ここでの勝利を目標に選手は皆んな、たえず精進している。このような最終目標の場で十分に活躍できるためには、学校あげての暖かい支援が必要となるが、選手が十分に活躍できるための人的条件や自然環境作りは、指導的立場に立つ者（顧問・コーチなど）によって作られるべきものであり、当然そのための努力を惜しんではならない。

2「選手の分析」

目標を立て、活動の場を作ることとあわせて、指導者は、選手の分析が大切なことであり、これが将来の具体的な活動に直結する資料となる。

肉体的な面から、筋力、敏しょう性、持久力（スタミナ）、柔軟性、調整力など細かな測定や、診断資料にもとずき、個人の特徴を十分に把握し、精神的な面からも性格、態度、協調性その他、スポーツマンとして備えているべき要素についても知り、指導の態勢を固めておく必要がある。

肉体的な発達と、精神的面のアンバランスでは、将来性を望めない。精神面で適しても体力面で劣ればやはり同じである。部活動に適した肉体と精神のバランスを持った選手の育成が、クラブ指導の目標につながることであり、7人の代表をもった全クラブ員の協調を最も必要とするハンドボール競技においては大せつな問題である。

指導者は選手、一人一人のあらゆる面を知ることにより細心の配慮を持って実践に移してゆくべきである。

3「練習計画」

選手個々の分析とハンドボール競技の技術分析によって練習計画が考えられるが、クラブ員全体が活動する練習計画と、個々の選手が分析結果により得た資料にもとづく計画を隔和させて実施することとは、チーム・ゲームにおいては第一に考えなければならないことである。

技術練習によってだけでは、体力の向上はとうてい望めない。また、体力は技術向上の基礎であると考えれば、個人にあったトレーニング処方として、ハンドボール競技に最も必要な筋力、敏しょう性、調整力（必要に応じて出せる力）と、運動能力（走・跳・投）を同時に高める練習計画、これらを総合して発揮することや、ゲームに対する感（動きを含む）を育成するといった個人と全体の隔和できる計画・立案が望ましい。

4「春の計画」（合宿・通学練習）

三月下旬〜四月初旬にかけて、春の合宿が計画される。（通学でよい）

ここで、指導者はいきなり高度な技術と取りくませる必要はない冬期練習でトレーニングされた体力に、さらに今後、夏までのシーズンを全員で乗り切るための補強を十分にできるような練習計画がよいと思う。即ち、春の練習に入る前に、冬の間、ロード・ワーク、なわとび、サーキットトレーニング等…で持久力筋力を鍛錬しているが、さらにハンドボール競技の基本となる走・跳・投の力を高める練習方法をとり入れながら、ハンドボール技術の組立ての基礎を固めてゆくことである。ここで基礎のプレーを十分に練習することが、ゲームにおける素晴らしい、力強いプレー展開を導くことになる。

春の合宿で先づ目標とすべきことは個人、個人が最も必要とし、しかも全員がマスターすべき基本技術（ボールを扱う技術、動き、攻防）の練習に主眼点をおくべきであろう。ここで基本技術をおろそかにして攻げき、防ぎょ、作戦に入ってゆくのは十分に力のある者についてはいざ知らず、早計であるといえる。現在の各大学チームでも春は基本技術の修得を目標にしている練習が多い。

一週間〜十日間の合宿練習により基本技術を練習してきたことと、選手個人に処方した体力、運動能力の育成による成果をみながら、四月に入って発表される新年度の試合日程によって今後の練習計画を割り出してゆく。ここでは新入部員の育成も当然、放置できない問題である。期待していた新入部員にだけとりかかることは禁ずべきことで、全新入部員を育てることが一つのクラブ目標であり、一つは優秀なクラブ（チーム）の存続に重大な影響を与えることになる。

現状で、計画的になされて来た練習に、途中から参加する新入に対して、工夫のなされた練習を加え、ゲームのシーズンに入ってゆくための仕上げをする練習とを十分にマッチさせてとりあげる必要を生ずる。技術全体、全く息抜きのできないハンドボールのチーム力の養成は欠かすことはできない。4月一杯を使って、7人の（GKを含む）連けいプレーの反復練習により見出される2人、3人の動き、連けいの不備な点、ゲームの感（センスある動き）、作戦的な動き、（速攻・セットプレー）などについて反省を加え、矯正しながら、練習の激しさを加えてゆく。このような中で、4月下旬には、他校とのゲームを計画し、実践によって前述した諸点を完全に自分のものにするようなことに加えて精神的な面で斗志を中心に、ゲームに対するかけひきに至るまでの養成を行なうことにする。練習の過程であり、まだまだ一人一人の動きは未完であっても、できる限り多く他チームとの練習マッチをやり、常に勝敗につながる原因の究明と、反省を加えさらに練習量と強度を加えてゆくようにする。

5「夏の計画」

5月〜6月に入ると、地方の大会、ブロックの大会などと予選からはじまり、ゲームのシーズンとなって、練習の成果を問われる時期に入ることになる。この期間に入ったならば、選手一人一人の調子をベストにするための配慮と、精神面での指導が必要となってくる。試合に臨むたびに自信をつけさせるような指導、心理面での安定感を与えることも、指導者の大きな任務である。特にここで最も注意すべきことは、選手の「疾病」、練習中の「負傷」である、毎日の練習でも然り、長期計画による練習でも同様、練習の「段階」をふむことにより、負傷者を出さぬようにすること、練習環境の整備、点検にも十分に気を配っておくことも管理上大切である。試合の期間に入って負傷者が出るようなやり方は、例えその時の状態が不可抗力であっても、指導者としては、まづい結果を生じたことになる。

夏期大会に出場するための重要な点として考慮に入れておくべきことは「気象条件」である。

盛夏、時間的に最悪条件である炎天下でのゲームを予想した練習も、夏期縫習では怠ってはいけない。悪条件下での練習により、これらのあらゆる条件に適応できる肉体、精神の鍛錬は、夏期大会のみならず、あらゆる試合に好成績を残すことにつながるようになる。

以上の諸点をひとつの表にまとめあげてみると次のようなことになろう。

練習計画表（あらまし）

月	計画	（主眼点）
4月	春の合宿（初旬）（休暇中） 通学中の練習	基礎体力づくり ← 基礎プレーのマスター ← コンビネーションプレー ← 7人の連けいプレーと試合によって覚えてゆく
5月	県大会	だんだんに全体（チーム）の調子をあげる ← ゲームについての問題点の反省による補強練習
6月	全国大会の予選など	← チーム全員体をベスト・コンディションに持ってゆく調整 雨天（つゆ）体力維持の問題
7月	各ブロックの大会など	夏期の気候条件に対しての配慮 悪条件下での練習
8月	全国大会	← 精神力、体力と技術のしあげを主眼にした調整練習

この練習計画表は、毎月の主眼点のあらましであり、一つの考え方のひながたとして提出したものです。これに技術的な面、精神的な面を鍛える具体的な練習計画の肉付けは、それぞれの学校、クラブで特徴を生かして、十分にご研究されていることと思います。（おわり）

全日本女子、第2次合宿へ

今秋ソビエトで開かれる第4回世界女子7人制選手権大会に出場の全日本女子（田村団長、小袋監督、早川主将ら17人）チームは、5月24日から6月6日まで14日間の予定で、三重県四日市市の田村紡績で第二次強化合宿に入った。

今回の合宿の主眼は、チームプレーの調整におかれ、4チーム（田村紡、大洋デパート、大崎電気、三菱鉛筆）から選抜された各選手は、所属チームの特長を攻守に身につけており、それをどのような形で一つにまとめあげるか苦心がはらわれている。

攻撃面では、小林、水谷らを軸とした田村紡に鈴木（大崎）を加えた速く小さい動きがベースとなり、早川、加藤（大崎電気）、蓮見（三菱鉛筆）、垂水（大洋デパート）、長谷川（田村紡）らアタッカー群のシュート力を活かす策戦が主展開になっている。『技と力のミックス』が、コーチング・スタッフの狙いとみられる。

なお、全日本代表チームは5月26日愛知県体育館の第4回東海実業団選手権に姿を見せ公開練習（地元チームと短時間トレーニングゲーム）を披露した。

第三次合宿は8月上旬長崎市で予定され、第20回全日本総合選手権にも出場する意向。

▽次号の技術教室は高橋健夫氏による「ボールの保持時間と得点の関係」を掲載の予定です。

▽このようなテーマをという希望がありましたら編集部へ御連絡下さい。

▽指導者・研究者のかたがたのリポートも積極的に掲載したいと思っています。用紙、字数など一切問いません。但し毎月10日前にお送りいただければ翌月号に、10日後ですと翌々月号の紙面ということになります。（編集部）

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

杉山　茂

▽……ヨーロッパ各国の室内シーズンは終盤に近く、あいついで今年のチャンピオンチームが決められているが、本誌既報のとおり、今シーズンは、おどろくほど国際試合の数が多かった。

男女の世界選手権が近づいたため当然の動きともいえるが、やはりこれはミュンヘン・オリンピック開催確定の報が各国協会を刺激したとみてよいだろう。

一日も早く、オリンピックへ向かってのスタートを切ろうとする態度が、このラッシュへつながったのだ。

人気集めたグルイア選手

▽……それにつれて、今年は多くのファンが各会場に集められている。

国際試合におけるヨーロッパファンの熱狂ぶりはすさまじいと伝えられ、ホーム・アンド・アウエイ式の試合で、ビジタースチームが実力を存分に発揮できないのは、ホームチームへの声援のはげしさに圧倒されるからだ、とさえいわれる。

筆者の知るかぎりで、今シーズンもっとも多くのファンを集めたのはドルトムントで行われた西ドイツ—ソビエト（男）戦の一万一千人だ。

西ドイツのリョーブキング、シュミット、ソビエトのソロムコ、クリモフ、パノフら当代一流プレイヤーの顔合せが人気を呼びこの大観衆となったものだ。試合も期待にたがわぬ大接戦の末20—19で西ドイツが辛くも勝ちを握った。

▽……スタープレイヤーの活躍がファンをひきつけることは洋の東西を問はぬことで、その意味で今シーズン最大の花形は、世界一のゲッターといわれるグルイア（ルーマニア）であろう。

彼の所属するステアウア・ブカレストはヨーロッパカップで優勝を飾ったが、グルイア見たさにステアウアの試合はいつも満員であった。

ヨーロッパカップの決勝はステアウアとデュクラ・プラーグ（チエコ）の顔合せながら東ドイツのフランクフルト体育館で行われ八千の観衆が集っている。

好カードなら自国は関係なくともファンが集るのはヨーロッパならではだ。

日本には残念ながら一人でファンを集めるほどのスターがまだ出現していない。なお、昨秋9月東京体育館での日独第1戦（対芝工大、対大崎女子）に集った観衆七千という数字は今シーズンの9番目ぐらいに当たる。

▽……ところでヨーロッパ各国の国内試合はどのくらいの観衆が入るのだろう？

例えば、西ドイツの国内リーグは毎週土曜日の夜、ホームコート制で行われているが千〜三千といったところのようだ。

フランスの国内選手権の決勝トーナメント（ベストエイト）は場所にもよるが、各試合平均千〜二千。今年の決勝はパリで行われ三千五百人を集めた。

もっとも、西ドイツにしろフランスにしろ国内試合の行われる体育館は大規模なものではない。

昨秋来日した西ドイツ選手団は日本各地での試合が、どこも大きく立派な体育館で行われたことに驚いていたが、こうした理由にもよろう。

入場料は、国内試合では各国平均邦貨二〜三百円のようで、国際試合はクラブ同士の場合が三〜五百円、ナショナルチーム同士で五〜七百円のようだ。

この面の話題では、これまで観客動員でかんばしい記録のないフランスが、ソビエトナショナルとの試合で二万四千五百七十フラン（邦貨約百七十九万円、観衆三千六百人）をあげたと伝えられたことだろう。フランスハンドボール界のこれは最高売上げ記録。

ルーマニア強化へ本腰

▽……4年前の第5回世界男子7人制に2連勝したルーマニアは昨春の第6回大会では3連ぱどころか3位に甘んじてしまったが、昭和45年の第7回大会そしてオリンピックでの最上位カムバックを狙って早くも主戦メンバーの固定化をはかっているようだ。

かってのルーマニアナショナルチームコーチ、イオン・クンスト氏（昭和35年来日）が語ったところによると、その顔ぶれは、FPがヤコブ、コスタケ、ポペスク、グルイア、マリネスク、オテリアガツ、グネス、ニカ、パップ、スペグヌ、オルバン、パラスチフ。GKがペヌ、ディツカということになりそうだ。

クンスト氏の話によればこれまでの主力モーゼル（別掲参照）レドル（GK）サムンギなどは、第一線から姿を消すことになるだろうという。代って登場する15人のうち25才以上は7人。ホープはグネス（24才）ガツ（23才）ペヌ（22才）らで最年少は21才のオルバン。

11人制の灯消えず

▽……オリンピックでの7人制決定と、多くの国の11人制放棄でフイールドハンドボールの将来はまったく暗いと思いのほかこのほど、IHF（国際ハンドボール連盟）では、5月31日から6月2日までリンツ（オーストリア）で第1回11人制ヨーロッパカップを行うことになったと発表した。

本誌が読者のお手元にとどくころには、すでに結果も出ているハズだが、シタルディア・シタルド（オランダ）、エーデルワイス（オーストリア）、TV・スハル（スイス）、GW・ダンケルセン（西独）ら11人制の国内選手権で優勝した4チームが参加している。

なお、11人制の世界選手権は来年西ドイツで、その第8回大会が開かれる予定だ。

ステラ（仏）の近況

▽……昭和39年6月に来日したフランスの名門ステラクラブは今年の第16回全フランス選手権の決勝へ3年ぶりに進出、5月11日パリで過去2回優勝の名門、USイブリーとの顔合せで優勝を争い20—18で勝った。

ステラには現在、ハンドボール部員としての登録（ライセンス）を受けているクラブ員が約四百人おり成年男女、ジュニア男女、幼年などの各クラスに分かれてチームをつくっているが、今シーズンは各部門すべて、フランス選手権でベストエイト入りをはたしたというからすばらしい。

宿願のフランス選手権を獲得した男子は、来日当時のメンバーがいぜん元気のようで、チボー（GK）、ベルジェール、プチ、デシャンらがレギュラー。

ベルジェールはフランスナショナルAのプレイヤーにランクされ、プチとデシャンも同Bのメンバーに加っていまやフランスの代表格だ。

ベルジェールは来日当時は学生で17才と最年少だったがみごとに成長した、といってよいだろう。監督はあいかわらずザゲル氏である。

ミューラーら健在
デンマーク、西独女子の試合

▽……今秋の第4回世界女子7人制選手権の準決勝リーグC組で日本と組んだデンマークと西ドイツは、本番を控え積極的に国際試合を行っているようだが、最近の成績では西ドイツはオーストリア（本大会不出場）に19—9で勝ち、デンマークはソビエトに9—13、9—11と連敗している。

西ドイツのオーストリア戦のメンバーと得点は次のようなものだが、昨秋来日のミューラーとミルターの元気な名が見え、おそらく日本チームとソビエトで対面することになるだろう。

【西ドイツ】		得
GK	イレネ	0
	ブース	0
FP	ギゼラ	4
	ヤコブ	3
	ミルター	0
	ミューラー	4
	レイトヴァイナー	3
	ウォーデ	0
	ヘルヘンバッハ	2
	ウエルツ	1
	ルチズカ	2
	ブラシエル	0
	モニカ	0
7MT（3）		16

イスラエル球界の実情

▽……近い将来、アジア地区への転入が予想されるイスラエル球界の実情を御紹介しよう。

イスラエルのハンドボール史は比較的浅く、しかもかなり最近まで11人制が主体であった。それが、一昨年あたりから7人制に熱を入れはじめそれにつれて普及度も急上昇した。

今年度は、一気に去年の倍近い157チーム、選手人口も二〜三千に成長したと伝えられている。

また今年から、屋外のバスケットコートを拡張して試合場に使っていたのを改め、テルアビ、ハイファ、エルサレム、ベルーシエドの4都市にハンドボール専用体育館を建設することになった。

▽……トップレベル強化の一策としては活発な国際試合を行うことになり、一年を4期にわけ、最初の5、6月は国内選手権、第2期の7、8月を第一次国際試合期、第三期の9〜11月を国内試合、第四期の1、2月を第二次国際試合期とする計画といわれる。

このプランは、すでに実行に移され、第一期（5、6月）にはルーマニアナショナルチームのコーチ、ニコライ・ネデフ氏を招いて指導をうけている。

本場ヨーロッパとの地理的条件などを考えると、本腰を入れはじめたイスラエルの将来は軽視できぬものがあるといえよう。

モーゼル、スウェーデンへ

▽……フランスのスポーツ紙〝レキプ〟によるとルーマニアの名選手ハンス・モーゼルが、このほどスウエーデンのIFK・クリステイアンスタド・クラブに加ったという。モーゼルはルーマニアが2回の世界制はをとげた時の主力。

世界女子選手権ヨーロッパ予選記録

第4回世界女子7人制選手権に出場する9ヶ国と、その組み合せは、本誌53号で既報の通りだが、ヨーロッパにおける予選成績が次のように知らされた。

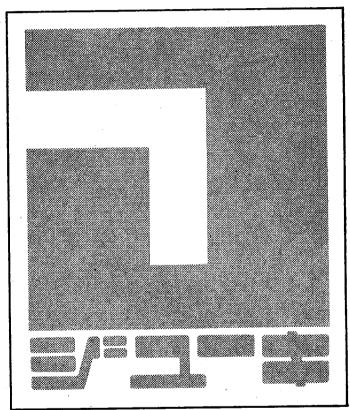
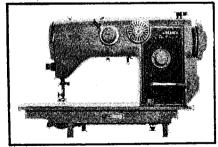
予選は1カード2試合で、互いのホームコートで1試合づつを行った。5カードのうち、デンマーク——ポーランド戦が1勝1敗となり、2試合の得点合計で勝者が決められた以外は、いずれも一方のストレート勝ちだった。

ルーマニア	10—9	スウェーデン
ルーマニア	16—8	スウェーデン
チェコ	12—8	ノルウェー
チェコ	15—10	ノルウェー
東ドイツ	26—2	ブルガリア
東ドイツ	12—8	ブルガリア
デンマーク	12—8	ポーランド
ポーランド	11—8	デンマーク

2試合の得点合計20—19でデンマークの勝ち

ユーゴ	21—10	オランダ
ユーゴ	23—11	オランダ

なお、西ドイツは予選不戦勝の幸運を得たほか、前回優勝国のハンガリー、開催国ソビエト、アジア大陸代表日本はいずれも予選を免除されていた。

ミシンはマークで お選び下さい

*HZD－956*型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社

本社工場　東京都調布市国領町８丁目２番地ノ　1電話　(480)1111番(大代表)

〝マスコミ対策〟の現状と問題点

「勝った翌日は新聞を見るのが楽しみだナ」「でもA新聞には出ていたがB新聞には載ってなかった」「もう少しハンドボールの記事を大きくしてもらいたいナ」……関東学生リーグのある日小耳にはさんだ選手の会話である。
問題点シリーズの3回目はハンドボール界の〝マスコミ対策〟を探ってみることにした。(編集部)

▽……昔も今も、いっこうにハンドボールに対するジャーナリズムの関心が高まりを見せないのは球界のかかえる大課題の一つだ。

現代ではアマチュアといっても、PRいかんがその競技の消長を握るカギともいえる。他競技を引きあいに出して申しわけないが、サッカーが爆発的な人気を得たのも、レベルの向上のほか、新聞、テレビなどの力が大きな作用をしている。

スポーツジャーナリストたちは「ハンドボール など……」という。球史の浅さ、栄光の足跡の乏しさ、普及度、大衆の関心のうすさが「…など」の持つ裏の意味だ。

それでも最近はかなりスポーツライターが大きな試合には姿を見せてくれるようになった。そして「ハンドボールというのも、じつくり見るとなかなか面白い…」といってくれる。

この言葉から推せば、球界自体のPR対策、PR態度が問題だといえるのではないか。

つまり、ハンドボールを理解してもらうことに、もっと積極的になるべきなのだ。

食わずぎらいの記者や放送関係者が意外に多いのでは、と考えるのは甘いみかただろうか……。

▽……まったくこれまでに例がないというわけではないが、いまのところハンドボール専問記者は全国に一人もいない。もちろん、他競技とあわせてハンドボールを受け持っている人は、各社に配置されているが〝片てま〟なわけだ。これも、球界にとってはマイナスである。そうでなくても多忙な稼業の記者たちに、ハンドボール界をのぞくヒマはなかなかない。とすれば、あとは、球界（協会）側から、始終、新鮮な話題を提供しつづける他はないのである。

▽……『僕らも商売だ。これはというニュースがあれば、その競技の比重など問題ではない。ハンドボール界のニュースが少く、小さいというのも、僕らがとびつくような話題や活動があまりないということになりはしないか』とある記者は云う。耳の痛いことばだ。

マスコミの関心とは実はそういうものなのだ。彼らが、小さなものを大きくしてくれるのでは決してない。大きなことがそのまま大きく評価されるのだ。

スポーツジャーナリズムの関心のうすさをなげく前に、ハンドボール界は、自らの姿勢をもういちど考えなおす必要があるし、マスコミへの対策を根本から検討しなおすことも必要だろう。

▽……ある記者が「実に不思議だと思った」といつて話してくれた例がある。

というのは、昨秋の日独戦の時の全日本戦（最終戦・駒沢屋内球技場）。好試合を期待し張り切って取材に出かけたのだが、会場のムードはさっぱり。聞けば本部協会がどうしたわけかこの試合の宣伝にあまり積極的ではなかったからだという。「試合の内容が主眼というもののこれじや拍子抜け。ビッグカードにも人が集らないという印象を与えて、ハンドボール界のために損だろう」とその記者はつけ加える。

▽……もちろんハンドボール界も努力はしている。昨年から本部協会に報道部門担当常務理事を設け窓口を固めるとともに、〝マスコミ対策〟をねることになり、報道畑に籍をおく増田一郎氏（慶大監督）が就任した。昨冬の全日本選抜では藤本常務理事が、今春の30周年記念試合は増田氏が記者席に常時いて、試合展開その他を解説するなど新しい試みも進められている。

増田常務理事は『マスコミ対策といつても、プロ団体ではないのだから限度がある。やはり、試合内容を向上させ、すばらしいゲームやプレーを展開することが、すべてだと思う。

もちろん、取材する立ち場の人や、観客などの便宜をはかる方法については、これからも研究を進めていくし、大会前後のPRだけではなく、協会の方針や事業計画なども機あるごとに報道ルートにのせるつもりだ』といっている。

▽……大会なり試合なりの報道関係者へのサービスとしては二～五週間前に大会日程、組合せなどの発表。約十日前に大会資料（予想、話題など）の提供。前日までにプログラムの配付。そして当日に試合記録（場合により個人記録も）配布あるいは結果の電話連絡というのが常識的なコースだ。しかし中央・地方を問はずこれさえも徹底されず、ましてや何の連絡をしなくても取材されるものだという考えが一部にあるのはその感覚が疑はれよう。

▽……テレビへの進出も大きなテーマだが、これはあくまで放送局側の事情が加るから簡単にはいかない。一昨年秋に中共ナショナルチームが来日したが、試合時間と放送時間の調整がとれずついにどの局からも放映されなかった。

いまのところ、NHKが、いちばん多くハンドボールを採りあげているが、それでも年間二～三回だ。民間放送にいたっては、最近3年間で「第19回早慶定期戦」（NET・昭41）、「日独第7戦、（対早大）」（TBS・昭42）「協会30周年試合」（12CH・昭43）の3回（関東地区）にすぎない。ここでは、やはり競技の〝人気〟がいちばん問題になるわけだろう。

▽……競技団体のPR活動はいまやすさまじいばかりだ。それが競技の普及になり、強いては強化にもつながるのだから当然だ。ハンドボール界もこの傾向に乗り遅れないよう、例えば「報道用記録用紙」の制定や、主要大会で「記者係」配置などを規定化するといった基本的な問題から再検討すべきではないだろうか。

連載（第4回）

ハンドボールの歩み ≪世界選手権編④≫

男子第1回〔1938 昭13〕はドイツが優勝

ハンドボールの歩みの世界選手権編は1、2、3と回を重ね、前回までで、現在までに行なわれた女子7人制世界選手権はすべて収録しおわった。今回からは、これに続いて、男子7人制世界選手権の歴史をたどってみるつもりである。

男子の世界選手権の歴史は女子世界選手権の歴史に比べるとずっと永く、すでに6回の選手権をおわっている。

7人制ハンドボールの歴史は、球歴の浅いハンドボールの歴史の中でも、特に新しいものということが云えよう。

11人制の競技は、ドイツのシュレンツラによって、ドイツを中心として、夏の屋外での競技として発展していったのであるが、7人制の競技はまずデンマークで芽生えた。この競技はまず屋外の小グランドで7人からなる二チームが対戦するという形で始められた。

7人制競技の基礎を確立したのは、デンマーク人ホルガー・ニールセンであった。

ニールセンは1898年にこの競技をデンマークのオルドルプにあった実業学校で始めた。彼はこの競技のルールを作りその競技に“Haandbold„と名づけ、その普及に努めはじめた。

1906年には、ニールセンによって作られた7人制ハンドボールのルールがはじめて、デンマークで発行された。またデンマークでは良く普及し、今世紀初頭には学校の体育祭で広く行なわれる競技に成長していた。

7人制競技はやがて、これらの関係者達によって、まず北欧の国々に普及をしていった。

これら北欧の国々では、1930年代の初頭になると、7人制ハンドボールを冬季のスポーツとして、室内で競技しようという考えが拡まっていった。

半年以上を氷雪に閉じこめられてしまう北欧の諸国では、冬季のスポーツは非常に重要な意味をもってきていた。このような条件のもとに、7人制ハンドボールは冬季の室内競技として、北欧諸国、特にスウェーデン、デンマークを中心にして発展し、室内競技に適するような戦術・技術が考案されはじめた。これが今日の競技の基礎となっている。

このように、11人制競技が、陽光の下の夏季のスポーツとして、ドイツを中心として発展したのに比べ、7人制競技は、全く条件を異にして、氷雪の中の冬季の室内競技として発展してきている。

以上のことからも判るように、11人制競技と7人制競技とは同じハンドボールと呼ばれるスポーツでありながら、その発展の基盤となったものは全く異っているといってよい程の対照的な発展の経過をたどっている。

1928年には、国際アマチュア・ハンドボール連盟（IAHF）が創設されているが、7人制ハンドボールの国際ルールはできておらず、各国まちまちのルールで試合を行なっており、国際試合は開けないような状況であった。

たとえば、ドイツでは、11人制競技同様ドリブルは無制限であったが、デンマークでは、ドリブルは全く許されないというような具合であった。

7人制のルール制定は1934年

1934年は7人制ハンドボールにとってまさに画期的な年であった。

というのは、この年の8月、スウェーデンの首都ストックホルムに於いて開催されたIAHF（国際アマチュアハンドボール連盟—現在のIHFの前身）の総会で、7人制ハンドボールの国際ルールが作成されたからである。場所は7人制の本場—北欧である。このことも7人制ハンドボールの歴史をたどるものにとっては、きわめて意義深いものがある。

1934年の夏から、7人制ハンドボールの国際試合が可能になったのである。

初の国際試合は
スウェーデン―デンマーク

あけて1935年、7人制ハンドボールの第1回の国際試合が行なわれた。

場所は7人制ハンドボール発祥の地、デンマーク。その首都コペンハーゲンに於いて、まさにその年のシーズンがおわらんとする3月8日。

対戦したのは、当時の7人制ハンドボールの第1人者であるデンマークとスウェーデンであった。

試合はスウェーデンが18―12でデンマークを破り、栄ある7人制ハンドボールの第1回国際試合の勝者になった。

11人制ハンドボール第1回の国際試合が1925年9月13日にドイツのハルレに於いて、ドイツとオーストリー（オーストリー6―3ドイツ）の間で戦われているから、それに遅れること10年にして、7人制ハンドボールの国際試合ははじまったことになる。

この第1回の国際試合以後も7人制ハンドボールは北欧以外にさして進出せず、もっぱら北欧の国々の間で戦われていた。

やがて、1936年のベルリンオリンピックが11人制ハンドボールを行ない、ドイツが栄光の座につき、ついで1938年には、2月に第一回男子7人制ハンドボール世界選手権大会が、7月には、第一回男子11人制ハンドボール世界選手権大会が開かれ、ハンドボール界最初の最高峯の大会が開かれる絶頂期を迎えるに至った。

第一回男子7人制
世界選手権大会

（1938年2月5日、6日於ドイツ・ベルリン・ドロツ体育館）

現在の世界選手権の盛況をご存じの読者諸兄は笑って、本気にしないかもしれないが、この第1回世界選手権大会にベルリンに集ったのは、世界から僅に4ケ国。

同年に開かれた11人制選手権には6ケ国、前々年のオリンピックにもやはり6ケ国の参加しなかったのであるから、当時の11人制と7人制の普及からみて、むしろ当然と云えるかもしれない。

開催国のドイツでさえ、7人制は従の立場というよりも、むしろ零といったほうが当っているような状況にあり、この大会には、11人制ハンドボールのチームをそのままあてるという状態であり、7人制の国際試合は全く経験がないというのであるから、当時の7人制の普及状態が知れよう。

今日の7人制と11人制の状況を知る者にとっては、全く今昔の感にたえないというところであろう。

ドイツチームは、7人制には、全くの未経験であったとは云え、すでに国際試合はオリンピックでの5試合を含めると29回を行なっており、11人制においては、向うところ敵なしという強さを誇っていた。

オーストリアも11人制では、ドイツにつぐ歴史をもち、11人制では、ドイツが1937年までに破れた二つの黒星はいずれも、オーストリアがつけたという輝やかしい歴史をもっていたが、7人制の経験には乏しかった。

スウェーデン、デンマークは7人制のプロといっても良い程の7人制の経験をもち、予想では、この両国のどちらかが、世界選手権を獲得するであろうとのことであった。

試合は二日間、総当りリーグ戦で行われた。

▽決勝リーグ

ドイツ	11―3	デンマーク
オーストリア	5―4	スウェーデン
スウェーデン	2―1	デンマーク
ドイツ	5―4	オーストリア
オーストリア	7―2	デンマーク
ドイツ	7―2	スウェーデン

最終結果

一位	ドイツ	3勝
二位	オーストリア	2勝1敗
三位	スウェーデン	1勝2敗
四位	デンマーク	3敗

以上の結果におわった。これは全くの予想外のできごとであり、11人制の強国は7人制にも強いという結果をもたらした。

これは技術・戦術が最近のように、洗練されていない所から来たもののようであるが、7人制のプロの国がこうもあえなく破れ去るとは、誰も考えていなかったところであった。

第二次世界大戦前のハンドボール界の盛り上りは、このあとの11人制大会を頂点として、ドイツの圧勝に終った。

この後も第二次世界大戦中、細々とその流れは続いていたが、戦争が激化するに及んで、ついにその歩みもとまってしまった。

7人制チャンピオンチームドイツは、戦争中スウェーデンと、4回対戦し、3勝1敗の戦績であった。

	優勝（ドイツ）メンバー	得
GK	ヘルボルツハイマー	0
	シュミツト	0
BK	シャウェル	2
	カロター	0
	マーンコップ	2
	ルベレー	0
	ウォスジンスキィ	0
FW	スタイニンガー	0
	サイリッヒ	6
	オルトマン	5
	チンメルマン	1
	ヘームケ	2
	オベルマルク	5
	ブリヨントゲンス	0

（注）得点数は決勝リーグ通算。

熊本ク、九州選手権を握る

各地の記録

東海実業団は常盤工業

熊本教員、2連勝成らず

第4回九州選手権（男子のみ）は、5月11、12の両日鹿児島市の県立甲南高体育館に九州6県から11チームが参加して行なわれた。

クラブ勢から唯一チームベストフォアに残った熊本クが、準決勝で接戦の末、大分教員を破り、2連勝を狙う熊本教員クと同県同士の顔合せで決勝を争ったが、後半、逆転に成功、初優勝した。

なお、この大会は第20回全日本総合九州予選を兼ね、優勝した熊本クの本大会（8月6日－10日、長崎市）出場が決まった。

▽1回戦（3試合）

鹿児島大 14（7－8、7－5）13 熊本愛球会

佐世保ク（長崎） 23（13－11、10－5）16 宮崎ク

鹿児島ク 29（18－12、11－10）22 長崎教員

▽準々決勝

福岡教員 23（13－6、10－6）12 鹿児島大

熊本教員 23（13－10、10－7）17 佐世保ク

熊本ク 22（12－8、10－7）15 西南ク（福岡）

大分教員 31（17－7、14－10）17 鹿児島ク

▽準決勝

熊本教員 17（8－9、9－4）13 福岡教員

熊本ク 19（7－11、12－7）18 大分教員

▽決勝

熊本ク 18（10－6、8－10）16 熊本教員

【教員】		得
GK	島田	0
FP	元田	6
	谷脇	1
	沢田	4
	緒方	3
	中津海	0
	竹原	0
	平井	1
	矢住	1
		16

【熊本】		得
GK	浜	0
	清水	0
FP	高宮	0
	柿塚	3
	佐々	1
	江口	3
	井	4
	上妻	0
	毛利	4
	上野	3
	加藤	0
		18

田村紡、若手で4連勝

第4回東海実業団選手権は5月19、26の両日名古屋市の愛知県体育館に男子14、女子2チームが参加して開かれた。

男子は予想通り常盤工業（岐阜）、本田技研、自衛隊久居（以上三重）、富士製鉄（愛知）が決勝トーナメントに勝ち残ったが、山田（芝浦工大出）を中心とした常盤工業が巧い試合運びで、本田技研をおさえ4連勝した。

女子は、愛知紡（愛知）と大洋紡（岐阜）が主力の故障から欠場したため、田村紡（三重）とブラザー工業（愛知）が2試合を行った。田村紡はレギュラー7人が世界選手権合宿で出場しなかったものの、甲村、吉開らを軸に一軍ゆずりの攻守をみせて連勝、4回目の優勝をとげた。なお、女子の部に中京大、中京女大混成の東海学生選抜が特別出場したが1勝もあげられなかった。

▽男子予選トーナメント各組決勝

常盤工業（岐阜） 32－9 日本碍子（愛知）

自衛隊久居（三重） 27－15 光文堂（愛知）

本田技研（三重） 25－9 大同製鋼（愛知）

富士製鉄（愛知） 33－18 三菱油化（三重）

▽同決勝トーナメント1回戦

本田技研 24（13－8、11－10）18 富士製鉄

常盤工業 32（16－9、16－6）15 自衛隊久居

▽同3位決定戦

富士製鉄 38－24 自衛隊久居

▽同決勝

常盤工業 26（12－11、14－4）15 本田技研

【男子最終順位】 ①常盤工業②本田技研③富士製鉄④自衛隊久居⑤三菱油化⑥日本碍子

▽女子

田村紡（三重） 21（10－3、11－1）4 ブラザー工業（愛知）

田村紡 29（11－5、18－0）5 ブラザー工業

【順位】 ①田村紡②ブラザー工業

▽女子オープン

田村紡 22－1 東海学生選抜

ブラザー工業 15－9 東海学生選抜

田村紡 33－12 東海学生選抜

ブラザー工業 19－13 東海学生選抜

和商ク、丸善石油降す

▼和歌山県春季選手権（5月・和歌山商）

▽男子準々決勝

丸善石油 10－6 和歌山商高

桐蔭高 21－6 和歌山高専

住友金属 11－9 マーキュリー

和商ク 19－8 郡賀高

▽同準決勝

和商ク 12（8－4、4－6）10 住友金属

丸善石油 14（5－5、6－6、……、1－1、2－1）13 和商ク

▽決勝

和商ク 20（11－5、9－9）14 丸善石油

▽女子準決勝

和歌山商 3（1－0、2－1）1 貴和高

粉河高 7（3－2、4－2）4 御坊商工

▽同決勝

粉河高 8（4－0、4－5）5 和歌山商

▽中学男子決勝

岩倉 7－5 岩出

▽中学女子決勝リーグ

打田 7－1 岩出

岩手 7－0 粉河

打田 11－6 粉河

【順位】 ①打田②岩手③粉河

若松、小倉工破り優勝　女子は明善が健在示す

▼福岡県高校大会（5月・明善高）

▽男子予選リーグ順位

▽A組①田川工②築紫中央③小倉西

▽B組①小倉工②香椎③博多工

▽C組①東海五②明善③田川商

▽D組①若松②宗像③田川農

▽同決勝トーナメント1回戦

小倉工 13（8－3、5－5）8 田川工

若松 9（5－3、4－5）8 東海五

▽同決勝

若松 14（7－4、7－8）12 小倉工

▽女子準々決勝

明善 28－2 福岡女商

福岡女 8－7 筑紫女

室見丘 10－4 信愛女

古賀 11－4 筑紫中央

▽同準決勝

明善 12（7－2／5－2）4 福岡女

室見丘 7（4－4／3－0）4 古賀

▽同決勝

明善 16（9－4／7－0）4 室見丘

山梨（女）18回目の優勝

▼山梨県高校春季選手権（5月・塩山商）

▽男子決勝リーグ

塩山商 10－3 甲府工

塩山商 12－6 園芸

園芸 10－9 甲府工

【順位】①塩山商＝12回目の優勝②園芸③甲府工

▽女子決勝

山梨 10（5－5／5－0）5 甲府二

山梨高は18回目の優勝

岡山大が大勝

▼岡山県春季一般選手権（5月・天城高）

▽1回戦（2試合）

倉敷工ＯＢ 17－14 岡山工ＯＢ

岡山教員 30－8 岡山ク

▽準決勝

岡山大 19－13 倉敷工ＯＢ

岡山教員 17－12 天城高ＯＢ

▽決勝

岡山大 28（15－6／13－7）13 岡山教員

高校は矢掛（男）と真備（女）

▼第23回岡山県高校春季優勝大会（4月・津山商）

▽男子準々決勝

関西 7－6 天城

操山 16－13 玉野

矢掛 17－7 青陵

児島 16－5 倉敷工

▽同準決勝

関西 8－7 操山

矢掛 12－11 児島

▽同決勝

矢掛 16（6－2／10－4）6 関西

▽女子準々決勝

井原 12－3 津山

青陵 8－1 落合

津山商 9－4 西大寺

真備 シードによる不戦勝

▽同準決勝

真備 11－5 井原

津山商 6－4 青陵

▽同決勝

真備 11（6－0／5－4）4 津山商

進境示した浜松南（高男）

一般男子は清水橋ク

▼第22回静岡県スポーツ祭、（5月清水）

▽高校男子準決勝

浜松南 19－10 静岡農

清水商 23－7 静岡東

▽同決勝

浜松南 15－15 清水商

引き分け両校優勝

▽高校女子準決勝

静岡城北 9－6 清水西

清水商 18－5 吉原

▽同決勝

清水商 13－5 静岡城北

▽一般男子準決勝

清商ク 10－6 富士ク

清水橋ク 15－8 天野回漕店

▽同決勝

清水橋ク 12（7－6／5－5）11 清商ク

▽一般女子決勝リーグ

静岡城北ク 11－7 清女高ＯＧ

清女高ＯＧ 7－0 清商ク

静岡城北ク 8－3 清商ク

舞鶴海上自衛隊管区大会

第1回舞鶴海上自衛隊管区大会は、このほど舞鶴海上自衛隊グランドに9チームが参加して行われ38掃隊が決勝で有力とみられた「はたかぜ」を破り優勝した。

▽1回戦（1試合）

はたかぜ 15－5 総監部併合

▽2回戦

38掃隊 6－4 教育隊

警備隊 11－9 通信隊

14揚陸隊 11－1 防備隊

はたかぜ 9－3 4駆隊

▽準決勝

38掃隊 11－10 警備隊

はたかぜ 8－3 14揚陸隊

▽3位決定戦

14揚陸隊 14－5 警備隊

▽決勝戦

38掃隊 17（10－5／7－4）9 はたかぜ

○……試合時間は決勝が20分ハーフ、それ以外は15分ハーフ。

各チームともよく練習がつまれ1月の講習（本誌50号参照）の成果が実らされていたのはうれしかった。

勝ち進んだ各チームは、この点特に目立つものがあり、2位の「はたかぜ」などは、艦をおりて以来、毎日数時間の練習や練習マッチを行っていたそうだ。

○……「当隊から優秀な選手をつくりあげたい」という幹部の熱意もたいへんなもので、竹山総監部長の志気を鼓舞する開会メッセージや、各チーム応援団の声援などで雰囲気も盛りあがった。

「ハンドボールはコートはせまいが、敏捷性を要しチームプレーチームワークを会得するに格好のスポーツ……」という司令の訓示で閉幕となったが、今後、各チーム、各選手がどのような成長をとげるか、大きな期待をよせることが出来る大会であった。（小西）

【順位】①静岡城北ク②清女高OG③清商ク

口加、延長で鹿町工破る
女子は島原農が優勝

▼長崎県春季選手権（4月・長崎市緑ヶ丘中）

▽高校男子1回戦（2試合）

長崎工 15―6 造船附属

口加 21―9 佐世保北

▽同準決勝

口加 21―11 西海

鹿町工 14―7 長崎工

▽同決勝

口加 12（3―6、6―3…0―0、3―1）10 鹿町工

▽高校女子準決勝

佐世保商 8―6 佐世保北

島原農 13―7 長崎北

▽同決勝

島原農 10（5―3、5―4）7 佐世保商

▽一般男子決勝

佐世保ク 25（11―11、14―8）19 長崎ク

○……高校男子はリードされた口加が後半、スタミナを活かして追いつき、延長後もその勢いをかってリード、鮮やかな逆転勝ちを見せた。高校女子は、2年生を主力にした島原農が前半から積極的に攻めて快勝、新人戦（2月）の雪じよくをとげた。

一般男子は2チームが参加しただけだったが、実力伯仲で接戦となり、勝負をかけた後半、佐世保クは、長崎クのパスワークの乱れをついてシュートを重ね押し切った。

富士製鉄・圧倒の5連勝

▼第12回愛知実業団リーグ（4月・名古屋金山体育館）＝男子のみ

▽1部

富士製鉄A 26―20 富士製鉄B

大同製鋼 23―14 タヨシ産業

富士製鉄B 24―8 大同製鋼

富士製鉄A 16―13 日本硝子

日本碍子 22―19 富士製鉄B

富士製鉄A 28―11 タヨシ産業

富士製鉄A 27―13 大同製鋼

日本碍子 18―17 タヨシ産業

日本碍子 23―16 大同製鋼

富士製鉄B 20―15 タヨシ産業

【順位】①富士製鉄A 4戦全勝＝5連勝6回目の優勝②日本碍子3勝1敗③富士製鉄B 2勝2敗④大同製鋼1勝3敗⑤タヨシ産業4敗

▽得点5傑①餅原（日本碍子）43②石川（富士B）25③黒岩（富士A）21④山辺（タヨシ）19⑤戸谷（大同）18

【2部順位】①トヨタ車体3戦全勝②三菱重工2勝1敗③中部電力1勝2敗④ブラザー工業3敗

相模台工と江南優勝

▼神奈川県高校春季選手権（5月・横浜）

▽男子準決勝

相模台工 12―8 Y校

南 21―19 横浜商工

▽同決勝

相模台工 17（10―8、7―7）15 南

▽女子準決勝

江南 6―4 市立川崎

大津 10―7 北鎌倉

▽同決勝

江南 13（6―2、7―2）4 大津

地方協会告知板

東京都協会役員と日程

東京都協会はこのほど43年度新役員と事業日程を決めた。主な役員と日程は次のとおり。

【新役員】▽会長 渡辺和美（大崎電気社長）▽理事長 佐野和夫（都立秋川高教諭）▽常務理事 猪狩武春、鴛尾武治、岡前義春、古賀健一郎、近藤金博、田中秀夫

【日程】▽都民体育大会(6月2、8、9日駒沢）▽第20回全日本総合予選6月15～17日（駒沢または大崎電気埼玉工場コート）▽第23回国体予選 7月20、21日（大崎電気埼玉工場コート）▽第15回関東選手権及び第23回国体関東予選8月23～25日（駒沢）▽第6回東京都選手権11月中旬（東京体育館）

なお、全日本総合の関東予選会は6月23日（浦和市高グランド）の予定。

佐賀理事長に甲斐氏

佐賀県協会は43年度新役員を次のように発表した。

▽会長 古賀甚一郎（神埼農高校長）▽副会長 川島秀重（唐津西高校長）▽理事長 甲斐忠義（神埼農高教諭）▽常任理事 佐々木鶴佐、岩瀬陽二 白武康麿、北川安政▽理事 峯正夫、平山茂男、北川汎、末次功、大久保力男 手島幸男、辻和征▽監事 野口七郎

ヤルダ君が来日

第3回世界女子7人制選手権（昭和40年10月・チェコ＝予選）に出場した全日本チームの通訳をつとめたヤロスラフ・プシーブラムスキー（通称・ヤルダ）君は、このほど法政大学で政治学を専攻するため来日した。約一年間、東京に滞在の予定。

茨城協会の20周年行事

茨城協会は、創立20周年を迎え、6月9日午前10時から県立水海道二高体育館で記念行事として男子・日体大―東京教大、女子・愛知紡―水海道二高による特別試合などを行う。

お願い・「各地の記録」「地方協会告知板」への寄稿を積極的にお願いします。用紙は自由、〆切日も特に設けません。編集部までお送り下さい。なお、原文を短くする場合がありますことを御了承下さい。

編集後記

○……今月号で本誌も創刊満8年。ここまで到達できたのは全国読者各位の御支援以外の何ものでもない。

最近は、実に多くのかたがたから原稿が寄せられている。読者との密着があってこそ本誌の使命は果されるのだ。いっそうの御協力と御教示を願いたい。

○……毎号の技術論をノートに帖って座右のテキストにされているかた、本誌をもとに内外の記録収集をしている九州の高校生グループ、母校の動向を知るのが楽しみだというOB……こうしたかたの存在を聞くたびに編集部は勇気づけられる。

○……50号の時にも書いたが、われわれは、現状を決して満足なものと思ってはいない。

日本ハンドボール界前進のために、あらゆる意見や理論が本誌に集められてこそ存続の意義がある。

「各地の記録」はもとより、身近かなハンドボールの活動記録やニュースをどしどし送って欲しい。小さな動きが、大きな動きへのヒントになることはよくあることなのだ。

○……今号用の表紙写真公募を試みたが、残念ながら応募者がなかった。次回は8月の〝全日本シーズン〟を予定している。ふるって参加して下さい（S）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第五十四号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十三年五月二十五日印刷 昭和四十三年六月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円
(年間購読11回・千二百円)